日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成

平成２５年度～平成２９年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

研　究　成　果　報　告　書

平成３０年５月

学校法人名　行　吉　学　園
大　学　名　神戸女子大学
研究組織名　古典芸能研究センター
研究代表者　川　森　博　司
（神戸女子大学古典芸能研究センター長
神戸女子大学文学部教授）

はしがき

研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」が、文部科学省平成25年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」のうち「研究拠点を形成する研究」に採択され、神戸女子大学古典芸能研究センターは、所蔵する能・狂言、浄瑠璃、歌舞伎、民俗芸能、沖縄祭祀に関する貴重な資料を活用して、古典芸能の始原と変遷を解明するための研究拠点を形成する事業をスタートさせた。

神戸は海に開かれた港町として開化の顔を持っているが、一方で源氏物語や平家物語などの古典文学やそこから展開した古典芸能の舞台としての側面も持っている。しかし、京都や奈良のようには伝統の重みを担っていないので、自由な発想を展開させていく余地が大きいのが利点である。古典芸能の諸ジャンルを横断し、新たな総合を目ざすためには、古都のしがらみから離れた新鮮な空間に研究拠点を形成する必要があると考え、それを実践していった5年間であった。

この補助金事業によって、日本有数といえる日本古典芸能関係の所蔵資料を有効に活用していくための資料室・展示室・閲覧室の整備をおこなうことができた。これにより、客員研究員をはじめ全国各地の研究者が落ち着いてじっくりと研究に取り組める環境が整備されるとともに、所蔵資料を活用した一般市民向けの本格的な展示もおこなうことができるようになった。

2年目以降は毎年11月に公開研究会を開催し、『能面を科学する―世界の仮面と演劇―』、『説経―人は神仏に何を託そうとするのか―』という2冊の単行本にその成果をまとめることができたのは、この補助金事業の大きな成果である。これにより、全国の研究者が注目せざるをえない先端的な研究が当センターで展開されていることが如実に示されたと考えている。また一方で、一般市民向けの特別講座および企画展示も、この補助金事業に採用されたことにより、古典芸能の横断と総合という大きな視野のもとに、従来を超える質と規模をもって展開することができたと自負している。

もちろん、今後に残された課題も多い。今回のプロジェクトは結論を出すというよりも課題を見出すことに力点が置かれていたともいえる。ただ、現時点での課題が5年前より展望の開けたものになっていることは強く実感される。研究の横断と総合は人のネットワークの横断と総合でもあり、それが研究拠点の形成の実質を形成していることを、この報告書は如実に示している。

平成30年5月

研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」研究代表
神戸女子大学古典芸能研究センター長
川森 博司

目　次

研究成果の概要

平成２５年度

特別企画・・・・・・・・・・・・1
特別講座・・・・・・・・・・・・5
展示・・・・・・・・・・・・・12
刊行物・・・・・・・・・・・・13

平成２６年度

特別企画・・・・・・・・・・・14
特別講座・・・・・・・・・・・18
展示・・・・・・・・・・・・・26
刊行物・・・・・・・・・・・・28

平成２７年度

特別企画・・・・・・・・・・・29
特別講座・・・・・・・・・・・33
展示・・・・・・・・・・・・・36
刊行物・・・・・・・・・・・・39

平成２８年度

特別企画・・・・・・・・・・・41
特別講座・・・・・・・・・・・51
展示・・・・・・・・・・・・・58
刊行物・・・・・・・・・・・・60

平成２９年度

特別企画・・・・・・・・・・・63
特別講座・・・・・・・・・・・69
展示・・・・・・・・・・・・・74
刊行物・・・・・・・・・・・・76

データベース・・・・・・・・・・78

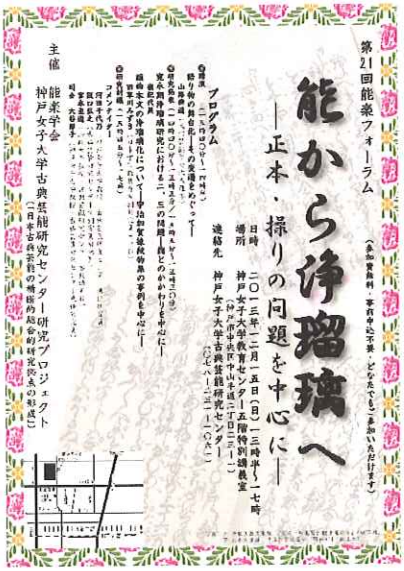
研究成果の概要

平　成　２５　年　度

平成２５年度
特 別 企 画

第21回能楽フォーラム
能から浄瑠璃へ―正本・操りの問題を中心に―

日時：平成25年12月15日（日）13:30～17:00
場所：神戸女子大学教育センター5F 特別講義室
申込不要・入場無料
主催：能楽学会
　　神戸女子大学古典芸能研究センター研究プロジェクト
　　「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」



プログラム：
講演
「語り物の舞台化―その変遷をめぐって―」
　　山路興造氏（民俗芸能学会代表理事）
研究発表
「寛永期浄瑠璃研究における二、三の問題―能とのかかわりを中心に―」
　　槇 記代美
「謡曲本文の浄瑠璃化について―宇治加賀掾段物集の事例を中心に―」
　　田草川みずき（日本学術振興会特別研究員 RPD）
研究討議
　コメンテイター
　　河田千代乃（神戸女子大学教授・古典芸能研究センター兼任研究員）
　　阪口弘之（古典芸能研究センター特別客員研究員）
　　宮本圭造氏（法政大学教授・古典芸能研究センター客員研究員）
　（司会）大谷節子（神戸女子大学教授・古典芸能研究センター兼任研究員）

成果公開：
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』８号 PP1-73
※『能と狂言』12（ぺりかん社、2014年発行）PP137【例会ノート】
　　大山範子（神戸女子大学古典芸能研究センター非常勤研究員）

『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』8号より

能楽フォーラム「能から浄瑠璃へ―正本・操りの問題を中心に―」を終えて

大谷節子

二〇一三年十二月十五日、古典芸能研究センターは、能楽学会との共催で、第二十一回能楽フォーラム「能から浄瑠璃へ―正本・操りの問題を中心に―」を催した。

「能から浄瑠璃へ」、これは時代的に順逆ならざる関係にある。比較文学の観点から、あるいは、典拠、依拠、影響関係の問題として、この二つは幾度となく併せ論じられてきた。浄瑠璃は人形と結び付き、浄瑠璃操りとなって現在に至るが、語りも人形も、その存在は能以前に溯る。しかし、能と浄瑠璃、両者の関係を口承の世界に引き戻して考えることは、問題を雲散霧消化してしまうだけであることを、研究史は物語っている。「正本」と「操り」という二つの観点を設けたのは、能と浄瑠璃を敢えて言葉と動きの要素に分解して、その関連の具体相を考え直してみたいと考えたためである。

講演は、「操り浄瑠璃成立前後」（『民俗芸能』五一号、一九七三年。『近世芸能の胎動』八木書店刊、二〇一〇年収録）という先駆的論文において、「能あやつり」と「操り浄瑠璃」の成立を論じられ、「操り浄瑠璃成立以前の傀儡芸」（『芸能史研究』一三二号、一九九六年）において傀儡芸に通時的な検討を加えられた山路興造氏に御願いした。氏は、聴覚に訴える芸能が視覚化される諸相を芸能史の俯瞰図の中で説き直された。

続いては、槇記代美氏と田草川みずき氏に、当該テーマに沿った最新の成果発表を依頼した。槇氏は「操り」をめぐる問題において、田草川氏はここにいう「正本」をめぐる問題において、近年、着実な研究を積み重ねている新進気鋭の研究者である。

槇氏の論は、能の影響が指摘されている寛永期の浄瑠璃「原田」「清重」「小袖曽我」の三曲を取り上げ、「原田」については、影響を与えた謡曲本文の問題に触れ、「清重」と「小袖曽我」については、能操りの介在の有無について検討を加えるものである。謡本諸本の異同の諸相をどのように判断するかについては、微細な検討と共に俯瞰的な視点が必要である。浄瑠璃正本と、特定の謡本一本との近似を云々する場合、（私も含めて）能の研究者は、先ずはその謡本の系統を考えるであろうが、氏のように浄瑠璃正本と謡本諸本とを年代順に同じ俎上に載せることによって見えてくるものもあろう。浄瑠璃正本に影響を与えた謡曲本文を割り出すことは、当時の謡享受、さらに言えば謡本の流布情況を把握することでもある。その上で、問題は浄瑠璃作者に再び戻っていくであろう。なお、「操り」をめぐる問題について槇氏は、寛永期の浄瑠璃「清重」と「小袖曽我」に能操りの影響を指摘した小林

健二氏の見解に対し、阪口弘之氏の論考を援用しつつ疑問を呈している。出版、書肆の問題も含め、両者の関連について更に議論が深まっていくことが期待される。

田草川氏の論は、浄瑠璃作者が引用した謡曲本文の系統について、節付にも調査の範囲を広げ、宇治加賀掾の正本と謡本との対応関係をより細やかに考察するものである。その中で、氏は「鉢木」のかざし詞を取り上げ、版本謡本が改変される以前に、既に太夫正本にかざし文句の形が見えることに着目する。「鉢木」中の「松はもとよりけむりにて」を謡う際に、松平徳川家を憚って言葉を変え「松はもとより常磐にて」と謡う箇所についてである。かざし詞とは、時と場に応じて不適切な詞を差し替えるものであり、本来一時的便宜的な処置である。時と場が変わり、憚る必要がなければ、本来の詞のままに謡われるのであり、基本的には謡本そのものを動かすものではない。「鉢木」の事例は、「松はもとよりけむりにて」が不吉であるとして、本文自体が改変される特殊な事例であるが、宇治加賀掾正本「扇の芝」が謡本に先駆けてかざし詞を採用しているという氏の指摘は、謡本が基本的には改変のない重版であることを考えるならば、新刻の浄瑠璃正本が実態に即して、いち早くかざし詞を取り込んでいることは予想される現象であり、書写関係によるのではない浄瑠璃正本の作成事情、つまり音曲としての謡享受を介した正本作成の事情が透かし見える点においても興味深い。

上記二本の研究発表に対するコメンテイターには、古代、中世、近世の芸能を各々専門領域とする河田千代乃氏、宮本圭造氏、阪口弘之氏に御願いした。河田氏は、記紀に記された隼人の服属神話に語られる「俳優」の語義、その具体的な所作の意味を折口民俗学に則って説かれ、芸能の根源を問われた。宮本氏は、天文年間から見える「えびすかき」による能の人形戯以降の、時代による形態変化を史料から辿ることによって、敷舞台ではなく本格的な舞台での囃子を伴う「能操り」の上演が「浄瑠璃操り」以前に溯るものではなく、むしろ浄瑠璃操りの登場に刺激を受けて成立したものであろうとの見通しを述べられた。「能操り」の語が使われるのが「浄瑠璃操り」が散見する時期と重なることが、その主たる根拠である。この場合に想定されている「操り」は舞台を設営しての上演を指している。この見通しは、浄瑠璃操りに能操りの影響を見る説に疑問を投げられた阪口氏の見解とも相通じるものであろう。

テーマの副題に掲げた「正本」の問題とは、本誌三号に掲載した「謡伝授と謡本」(注1)に記した、謡本における「証本」と「正本」、そして「章本」の問題でもある。証本とは、これを所持管理する家が正統な継承者であることを証明する、その証拠となる本の謂いであるが、管見によれば、現存する謡本において、その奥書に「証本」を掲げた最も古い例は、天文年間に観世小次郎元頼が記した、いわゆる元頼本である。以後の謡本に見える「正本」は、「証本」の略体としての体裁を取るものの、「証本」の意識を失い、「章本」へと移行する。浄瑠璃本が正本を称するのは、謡本の体裁を模してのことであろうが、ここに「証本」を称することを憚る意識があったのかどうか、両者の「正本」をめぐる意識の位相、「証本(正本・章本)」と出版との関係も双方にとって重要な課題であろう。

浄瑠璃が操りと結びつく以前に、「手くぐつ」「えびすかき」「ど

うこのぼう」「ひいなさるがく」「てずし」と呼ばれる担い手が人形戯で能を演じていたことは、諸説に異論はない。能操りという呼称が史料に現れるのは寛永初年であるが、「操り」の存在を前提としたこの呼称が、「操り」が操り浄瑠璃を指すに至って生まれた、区別のための呼称と考えるのは自然であろう。つまりは、「操り」と記されているものの実体が問題となる。

能と浄瑠璃の間には、順逆ならざる関係があるのは確かであるが、その影響関係を確認して終わるのではなく、そこから見えてくるものを中世からも、また近世からも考える段階に入りたいと思う。本フォーラムがその契機になることを願う。

注1　大谷節子「謡伝授と謡本」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』三号　二〇一〇年三月）。

付言　本企画は、研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」（平成25年度文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」採択）の一環として行われた。

古典芸能研究センター研究プロジェクト
「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」
公開研究会「第二十一回能楽フォーラム　能から浄瑠璃へ
―正本・操りの問題を中心に―」

〔日　時〕二〇一三年十二月十五日（日）
〔会　場〕神戸女子大学教育センター五階特別講義室
〔プログラム〕

講　演
「語り物の舞台化　―その変遷をめぐって―」
山路　興造（民俗芸能学会代表理事）

研究発表
「寛永期浄瑠璃研究における二、三の問題
―能とのかかわりを中心に―」
槇　記代美
「謡曲本文の浄瑠璃化について
―宇治加賀掾段物集の事例を中心に―」
田草川　みずき（日本学術振興会特別研究員ＲＰＤ）

研究討議
〈コメンテーター〉
河田千代乃（古典芸能研究センター兼任研究員・本学教授）
阪口　弘之（古典芸能研究センター特別客員研究員・本学名誉教授）
宮本　圭造（古典芸能研究センター客員研究員・法政大学教授）
〈司会〉
大谷　節子（古典芸能研究センター兼任研究員・本学教授）

神戸女子大学・神戸女子短期大学オープンカレッジ秋期講座

特別講座「語りの文化と日本人」

期間：平成 25 年 10 月 21 日～12 月 2 日
　　毎週月曜・全６回（見学会込み）
時間：午後 2 時～3 時半

　文字の文学や映像メディアが普及する以前の日本人の情緒は、語りの文学や芸能によって育まれてきた部分が大きく、それは現代においても心の奥深いところで作用している。この講座では、古代から近代に至る「語りの文化」の豊かさを学びながら、見学会でそれらの文学・芸能の舞台を訪ねることにより、日本人の感受性と行動原理の源を掘り下げていく。そして、それを通して、伝統的な文化を現在・未来に活かしていく道筋を考えてみることにしたい。

内容：

① 10 月 21 日
　古事記―神々の語り―
　　河田千代乃（古典芸能研究センター兼任研究員）

② 10 月 28 日
　近松世話浄瑠璃の世界
　　井上勝志（園田学園女子大学近松研究所所長）

③ 11 月 11 日
　谷崎潤一郎―関西体験と語りの文学―
　　安田　孝（神戸女子大学教授）

④ 11 月 18 日
　説経『しんとく丸』の世界
　　阪口弘之（神戸女子大学名誉教授）

⑤ 12 月 2 日
　昔話「鶴女房」と日本人―別れの物語の構造と心情―
　　川森博司（古典芸能研究センター長）

〈見学会〉11 月 23 日（土）
　語りの背景を訪ねる
　　コース：曽根崎・お初天神―→四天王寺―→生国魂神社―→国立文楽劇場
　　担当講師：阪口弘之、川森博司

成果報告：
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』８号 PP74-79

【特別講座要旨】

古典芸能研究センター特別講座

「語りの文化と日本人」

日時：二〇一三年十月二十一日～十二月二日（月）
午後一時半～三時　全六回（見学会込み）
会場：神戸女子大学教育センター（三宮キャンパス）

〔各回の内容〕

十月二十一日　古事記　―神々の語り―
河田千代乃（古典芸能研究センター兼任研究員）

十月二十八日　近松世話浄瑠璃の世界
井上勝志（園田学園女子大学近松研究所所長）

十一月十一日　谷崎潤一郎　―関西体験と語りの文学―
安田　孝（神戸女子大学教授）

十一月十八日　説経『しんとく丸』の世界
阪口弘之（神戸女子大学名誉教授）

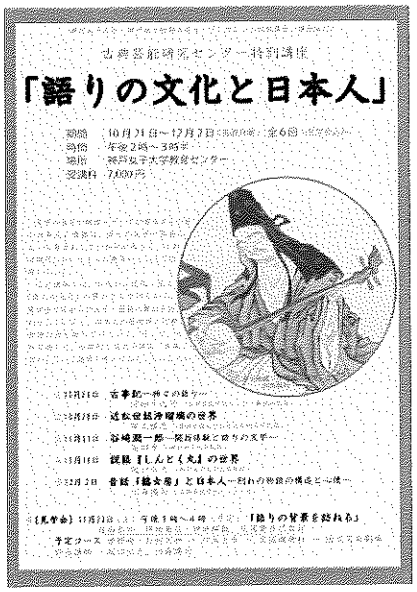
十二月二日　昔話「鶴女房」と日本人
―別れの物語の構造と心情―
川森博司（古典芸能研究センター長）

※十一月二十三日（土・祝）十三時～十六時
見学会「語りの背景を訪ねる」
コース：曽根崎・お初天神→四天王寺→生国魂神社
→国立文楽劇場
担当講師：阪口弘之、川森博司

講座の趣旨

「語りの文化」というのは、文字を介することなく口から耳へと語り継がれた文化である。近代化以前、あるいはマスメディア普及以前の日本人の情緒は語りの文学や芸能によって育まれ、それは現代の日本人の心の奥底においても、それとは意識されない形で作用しているのではないだろうか。

今回の講座で取り上げる対象は『古事記』から説経、浄瑠璃、昔話、谷崎潤一郎まで、時代的にも幅広い範囲にわたり、ジャンルもさまざまである。それを「語りの文化」という一本の糸でつないで、日本人の感受性と行動原理の源を探ってみることにした。また、「語りの文化」は語りの場においてその都度つくり上げられるものであり、特定の場所との結びつきが強いものなので、オプションとして語りの現場を訪ねる見学会を設定して、講座内容を掘り下げる機会とした。



古事記 ―神々の語り―

河田千代乃

稗田阿禮という人物は、「古事記」序文にのみ登場するが、その出自も性別も不明、謎の人物である。

「古事記」序文は、偽書であるという説があるが、偽書でもよい。その「偽書」である序文をあえて付け加えてまで何が言いたかったのかが問題である。序文の存在意義はどこにあるのか。

それは序文にのみ登場する稗田阿禮その人にある。

「古事記」の成立の経緯は、その序文に記されており、そこに稗田阿禮が大きく関ってくる。

古代律令国家を確立された第四十代天武天皇は、宮廷や豪族達の新しい秩序を作るために自ら「古事記」の編纂に着手されるが、この時、召し出されたのが、この稗田阿禮という人物であったと序文は記す。

序文によれば、稗田阿禮は、記憶力抜群の人物であった。年は二十八才。

> 人と為り聰明にして、目に度れば口に誦み、耳に拂れば心に勒す。

天武天皇は、自ら編纂された「古事記」をまず、この稗田阿禮に「誦習」させたのである。

「誦習」とは「誦み習う」、すなわち節をつけ誦みあげることである。「古事記」は、まずもって、この記憶力抜群の人物のその「記憶」に預けられたのである。

「古事記」は、はじめから成文化された書ではなかった。後に太安万侶によって文字に記されたのである。

序文が言わんとすることは、まさしくこの一条なのである。

当時のわが国における官吏達の文字習熟状況から考えれば、純粋漢文による正史「日本書紀」の編纂が同時に進行していたのであるから、「古事記」を成文化するということであるならば、文字に精通した太安万侶一人を起用すれば済んだのである。

ところが、「古事記」は、成文化される前に、稗田阿禮という記憶力抜群の人物に「誦習」させたという。

ここにこそ、「古事記」序文が言わんとする何物かがあり、稗田阿禮の存在価値がある。

「古事記」は、天皇家の内廷伝承であり、祭祀王たる天皇の聖なる権威の由来を説くものである。神々とその直孫である天つ神の御子（天皇）がその聖なる権威で国を作り上げてゆくことを説く神話である。祭祀の起源を説き、祭祀王の淵源を説く。

天武天皇は、天皇家の「神話」を編纂されたのである。そしてこの「神話」を「後葉に流へむ」とされたのである。

この時、「後葉に流へ」るには、二つの方法があった。一つは「誦習」であり、もう一つは「撰録」である。いはば、「口承」と「書承」である。

文字を持たなかった前代の長い間は、「口承」のみによって伝承はなされてきたが、今やこの時代、日本人は漢字に習熟していた。しかし、文字によって伝えることへの不安があったはずである。確かなものを伝えるには、「口承」でなければならない。ま

してや天皇家の神権を説く神話ということになれば、みだりに成文化してはならないという意識が強かったと考えられる。

「古事記」は本来、成文化して人々に読まれるべく編纂されたものではなかったのである。

稗田阿禮による「誦習」、すなわち「口承」においてこそ、その存在意義を発揮するように編纂されたものであった。

それでは稗田阿禮の「誦習」は、どのように発揮されたか。

それは、宮廷における祭祀の場においてである。

たとえば、天皇の即位儀礼である「大嘗祭」において、天皇が大嘗宮にあって祭祀を行う時、宮殿の外では、「語部（かたりべ）」が「古詞（ふることば）」を奏し続けた。

「古詞（ふることば）」とは、神話である。祭祀の間、神話が語られるということは、その祭祀の始まりに時空を合わせることである。それはその祭祀を証明することである。

「古事記」は、まさしく「古詞（ふることば）」として編纂された「ふることぶみ」であった。それは、稗田阿禮のような語りの徒―語部―によって誦習せられるものであって、文字などに落として伝えてはならないものであった。

「古事記」全篇を貫くリズミカルな調子は、「古事記」が誦習せられたもの、すなわち語られたものであることをこよなく表している。

言魂の力によって祭祀空間において神語りを具現し、祭祀をその始まりの時空に合わす役割を荷った人物として稗田阿禮は序文に記された。稗田阿禮の「古事記」誦習の意義は、まさしくここにあるのであって、稗田阿禮が男性か女性かなどは問題ではない。

「古事記」は、宮中の祭祀において語られた神話であった。神話を語ることは、聖なる時空を具現することであって、その祭祀の存在を証明する。

稗田阿禮は、「古事記」が語られたものであることを証明するために登場させられた、語りの徒の象徴的人物であった。

****

近松世話浄瑠璃の世界

井上　勝志

§　歴史を語る

『浄瑠璃御前物語』は、その冒頭「去程に浄瑠璃御前の本地をくわしく尋るに」と、「今こそ上瑠璃御前の成仏は疑ひなし　何程も弔ひ申せやとて　御墓の上に寺を建て　冷泉寺と額を打ち則ち寺領を相添へて　冷泉にぞ給はりける」という文言とが呼応して、冷泉寺の縁起を語る本地物となっている。これが浄瑠璃という芸能の本質であった。

§　終わりから始まる

しかるに、世話浄瑠璃とは、そのような歴史を語るのではなく、当代の出来事を題材とする。心中なら心中の知らせを受けて浄瑠璃に仕組むのである。向井芳樹氏は「すでにあった事件を再現するという、結果から逆に劇を構想して行く世話浄るり独自の演劇の論理」と述べられた（「近松時代浄るりの論理と方法」）。

しかし、単なる「再現」であったろうか。

§　明日を語る

たしかに、歌舞伎の場合は、「其聞てきたはなしの通、すぐさまにいたさふ」（『卯月九日其あかつき明星茶屋』）、「其有のまゝを狂言に仕り」（『八月にさむる卯月の夢』）、「其咄の通りをさつそく取くみ」（『心中茶屋咄』）、「すぐにとりくみまして」（『けいせいならみやげ』）等々、事件の再現性・速報性を口上で高らかに謳っている。

一方、浄瑠璃においては、歌舞伎のように「たつた一夜に作り」ということは不可能で、違う土俵で勝負せねばならない。『曾根崎心中』はじめ近松の心中物の中で死に行く者たちは、昨日今日まで心中など余所のことだと聞いていたが、明日よりは我が身の上だと述懐している。もちろん彼らがこのようなことを書き残したわけではない。事件の再現といったときに確実に抜け落ちてしまう、このような述懐に見られる彼らの思いを掬い取ることで、近松は間接的に彼らの明日を語るのである。

そして、おはつについて「未来成仏疑ひなき、恋の、手本となりにけり」と結び、また、仏の姿に身をなす橋を渡った小春が「流れの人のこの後は、絶えて心中せぬやうに、守りたいぞ」と衆生済度を願うとき、彼女たちは浄瑠璃御前よろしく仏と成るのであり、そんな彼女たちの生涯の最後を描いたこれら世話浄瑠璃（心中物）は、単なる事件の再現ではなく、当代の本地物とも言うべきものとなり得ているのではなかろうか。

****

谷崎潤一郎　―関西体験と語りの文学―

安田　孝

＊後掲（80～83頁）

****

説経『しんとく丸』の世界

阪口　弘之

説経『しんとく丸』には、四天王寺と河内や和泉の処々を結ぶようにして語られてきた四天王寺伝承が確かな横たわりをみせる。古来より四天王寺は聖徳太子信仰と、舎利信仰、法華経信仰をもって尊崇を集めたが、中世には西門の浄土信仰が加わり、これらが一体化して貴族から次第に庶民層にも支持基盤が拡大した。四天王寺を重要な舞台にする説経諸作はいずれもこの念仏信仰の拡がりと共に語り出されたもので、これに深く関与したのが律宗や融通念仏の人々であった。とりわけ叡尊、忍性らの活動が注目される。彼らの宗教的営為が物語的虚構をもって、しんとく丸と乙姫の形象を生んだ。そうした物語の成立基盤については、既に触れたこともあるが（『説話論集』第十五集「『しんとく丸』の成立基盤」）、本講座では、しんとく丸が乙姫を見染めた四天王寺聖霊会の稚児の舞の場が、「世一の僧」叡尊の四天王寺別当就任に端を発した「胡飲酒」相承一件（天王寺楽人秦広栄が、叡尊のとりなしで、大内楽人多忠有に舞曲「胡飲酒」の伝授を望んだが拒絶

され、相論に及んだ事件）を踏まえた物語虚構であることなどについて、具体的に述べた。説経はいつの頃か、それも誰からともなく語り出された物語にはじまるという理解が一般的である。しかし、その物語は見事に虚構化されながらも、そこに揺るぎのない宗教的主張が籠められている。『しんとく丸』の場合も、忍性の石の鳥居造立、あるいは叡尊の近木将軍寺での「菩薩十重戒」授戒など、浄穢寄集地での彼らの宗教的営為が、象徴と寓意をもって、貴種盲目の遺棄、乞食流浪の物語を綾なすのである。そうした説経の語り物としての特質にも話題を展開した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

昔話「鶴女房」と日本人
―別れの物語の構造と心情―

川森　博司

日本の昔話においては、結末で別れに至る展開が好んで語られる。それを聞く日本の聴衆にとってはジーンと来る展開であるが、世界規模で見た場合、このような「別れ」で終わる結末のありようは一般的とはいえず、日本的なドラマツルギーの特徴をあらわしているものと考えられる。この回では、「鶴女房」をはじめとする日本の異類女房譚を取り上げて、その物語の構造を検討するとともに、そこに込められた「はかなく消えていくものを美化」する心情が日本人の行動を規制していることを確認した。

それは「もののあわれ」の美学を構成するものであるが、一方で幻滅から別れに直行するパターンを繰り返す方向に実際の人生を導いてしまい、現代日本人の生き方にある種の息苦しさや窮屈さをもたらしているように思われる。鶴女房は結婚した男のもとを離れていさぎよく消えてゆく。他の動物を女房とする日本の昔話もおおよそ同様の結末に至るのであるが、鶴女房のように男のもとを去っていかないで、幻滅の体験から新たな関係を構築していく物語は日本の昔話のなかに存在しないのであろうか。

ひと昔前までの地域社会で語り継がれてきた日本の昔話を詳しく見ていくと、鶴女房のように幻滅から別れに至らず、幻滅体験を経て新たな人生を開いていく展開を持つ昔話も見出すことができる。そのひとつの例として、岩手県遠野で伝承される「二度咲く野菊」という昔話を取り上げた。野菊とは結婚した殿様の前で屁をひったために離縁された女性の名である。その後十年を経て、二人は再婚する。野菊に産ませた子どもの指摘によって、「世の中に屁をたれない者などない」という当たり前の事実を殿様が承認することによってである。つまり、男のほうが変わることによって「二度咲く野菊」の別れで終わらない物語の展開が可能になったのである。

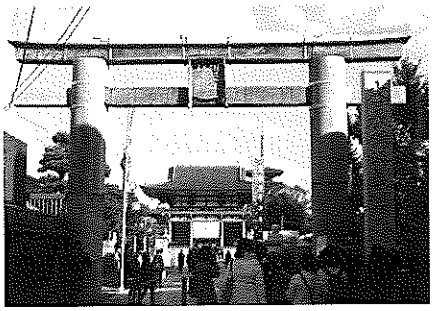
このような展開を持つ昔話も日本の伝統社会において語り継がれていたわけである。絶望の先に再生の光が見える語り方、闇の中に光が見える語り方は、日本の語り物の原型をとどめる説経節にも特徴的に見られるものであり、「別れの物語」を超える「希望の物語」の可能性が日本の語りの文化に潜在していることを指摘して話を終えた。

古典芸能研究センター特別講座「語りの文化と日本人」

見学会「語りの背景を訪ねる」報告

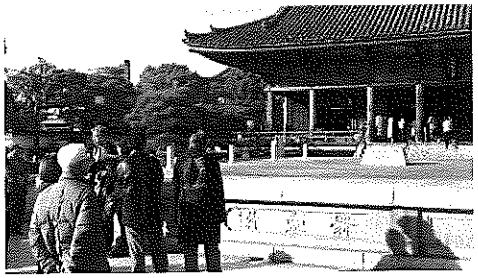
今回のオープンカレッジ特別講座「語りの文化と日本人」では、特別企画として、講座でとりあげられた文学作品に縁の場所を訪れる見学会を開催しました。

当日は、爽やかな秋晴れの中、まず阪急梅田駅から徒歩でお初天神（露天神社）に向かいました。お初天神では、お初と徳兵衛の記念碑の前で阪口講師から「曽根崎心中」に関する解説があり、その後は境内を自由に散策しました。



続いて地下鉄で四天王寺へ向かいました。最寄駅から歩き、四天王寺の西の入口である石鳥居に到着。門前で、説教浄瑠璃「しんとく丸」や日想観（ここから海に沈む夕陽を拝し極楽往生を念じる）などについて阪口講師の話があり、一同は西の方角を拝みつつ、門を入りました。休憩後は、六時堂正面の石舞台前に集合し、亀の池を眺めながら、両講師の話を聞きました。川森講師が、人生幸朗・生恵幸子コンビの「泥亀」を話題にし、一同爆笑という一幕もありました。

四天王寺からさらに歩いて生国魂神社を目指します。生国魂神社では、表参道門前で「曽根崎心中」生玉社の場や浄瑠璃「生玉心中」について阪口講師の解説を聞き、本殿を拝んでから境内社の浄瑠璃神社へお参りしました。その後、生玉坂を見下ろしながら、川森講師が谷崎潤一郎の『春琴抄』冒頭部分を朗読、その風景を楽しみました。



最後は生玉坂を下り、国立文楽劇場を訪問。資料展示室をボランティアの方にご案内いただきました。見学会はここで解散となりましたが、希望者はさらに文楽公演を観劇しました。

今回の見学会は、途中までの参加も可能で、時間的にも、参加しやすかったと好評でした。またこのような企画をしてほしいとの要望に応えて、次回も見学会の開催を予定しています。

（大山記）

写真展
2013 年 4 月「三ツ山大祭」
—喜多文庫所蔵写真(1973 年)と並べて—

平成 25 年 5 月 13 日～8 月 30 日

語りの文化

平成 25 年 9 月 9 日～11 月 18 日

特別展
古典芸能の舞台　神戸

平成 25 年 7 月 20 日～9 月 7 日
神戸女子大学図書館（須磨キャンパス）1 階アートギャラリー

神戸女子大学古典芸能研究センター紀要　８号

編：神戸女子大学古典芸能研究センター
頁数：118 頁
発行日：2014 年 6 月 30 日

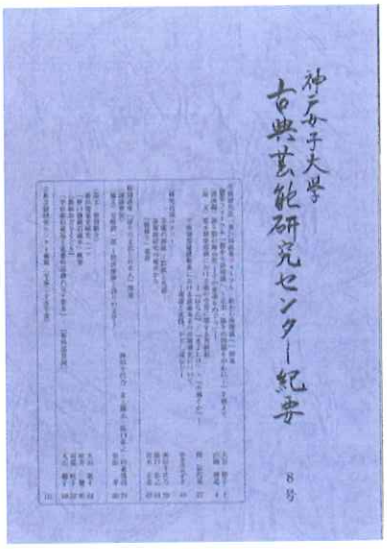
目次：

公開研究会「第 21 回能楽フォーラム　能から浄瑠璃へ」関連
　能楽フォーラム「能から浄瑠璃へ—正本・操りの問題を中心に—」を終えて　　大谷節子　p. 1
〈講演録〉語り物の舞台化—その変遷をめぐって—　　山路興造　p. 4
〈論文〉寛永期浄瑠璃における能の受容に関する再検討
　　—『はらた』・『きよしけ』・『小袖そか』—　　槇記代美　p. 22
　　宇治加賀掾段物集における謡曲本文の浄瑠璃化について
　　—理論と実践、かざし詞など—　　田草川みずき　p. 40
〈研究討議コメント〉
　　芸能の源流—服属と礼讃—　　河田千代乃　p. 59
　　浄瑠璃研究の視点から　　阪口弘之　p. 61
　　「能操り」覚書　　宮本圭造　p. 67

特別講座「語りの文化と日本人」関連
〈講演要旨〉河田千代乃・井上勝志・阪口弘之・川森博司　　p. 74
〈論文〉谷崎潤一郎 —関西体験と語りの文学—　　安田孝　p. 80

〈論文・資料紹介〉
　湊川能楽堂略史（一）　　大山範子　p. 84
「野口勘蔵旧蔵本」概要　　味方健　p. 95
『新板おどりくどき』　　川端咲子　p. 107
「平松家旧蔵福王流番外謡曲八百十番本」・〔板外謡目録〕　　大山範子　p. 109

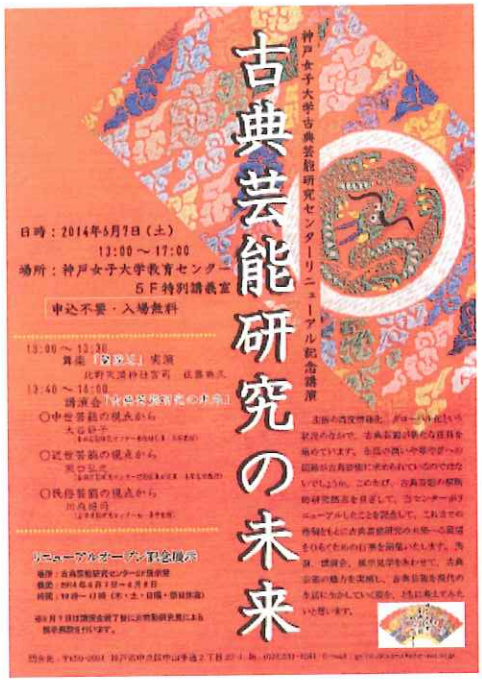
古典芸能研究センター彙報（平成二十五年度）　p. 111



平　成　２６　年　度

平成２６年度
特 別 企 画

神戸女子大学古典芸能研究センターリニューアル記念講演
古典芸能研究の未来



日時：平成 26 年 6 月 7 日（土）13:00～17:00
場所：神戸女子大学教育センター5F 特別講義室
申込不要・入場無料

生活の高度情報化、グローバル化という状況のなかで、古典芸能が新たな注目を集めています。生活の潤いや華やぎへの回路が古典芸能に求められているのではないでしょうか。このたび、古典芸能の横断的研究拠点を目ざして、当センターがリニューアルしたことを記念して、これまでの蓄積をもとに古典芸能研究の未来への展望をひらくための行事を開催いたします。実演、講演会、展示見学をあわせて、古典芸能の魅力を実感し、古典芸能を現代の生活に生かしていく道を、ともに考えてみたいと思います。

プログラム：
舞楽「蘭陵王」実演　北野天満神社宮司　佐藤典久
講演会「古典芸能研究の未来」
「中世芸能の視点から」大谷節子（古典芸能研究センター兼任研究員・本学教授）
「近世芸能の視点から」阪口弘之（古典芸能研究センター特別客員研究員・本学名誉教授）
「民俗芸能の視点から」川森博司（古典芸能研究センター長・本学教授）

成果公開：
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』９号 PP1-36
『神女広報－CROSSROADS－』Vol.19 2015 冬
※http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/public_rel/crossroads/pdf/crossroads_vol19_02.pdf

教育研究活動

古典芸能研究センターからのお知らせ

古典芸能研究センターリニューアル記念講演

「古典芸能研究の未来」

舞楽「蘭陵王」

平成26年6月7日（土）、古典芸能研究センターのリニューアルを記念して開催した講演会「古典芸能の未来」は、予想を超える大勢の来場者を迎え、モニタ聴講の別室を開放するなど、センターにとって賑々しい船出となりました。

講演に先だって、開会にふさわしく華やかで勇壮な舞楽「蘭陵王」を、北野天満神社 佐藤 典久宮司に披露していただきました。その後、古典芸能研究の未来について、センターの研究の柱である中世芸能・近世芸能・民俗芸能それぞれの専門的立場から、研究員が講演しました。

神戸女子大学教授
大谷節子兼任研究員

神戸女子大学教授 大谷 節子兼任研究員は、中世芸能の視点から、「能の解釈史―高砂・敦盛二題」と題し、婚礼の席で「高砂」の島台が飾られるなど、日本人にとってもっとも馴染み深い能「高砂」を中心に、中世から現代にいたるまで、能の作品解釈がどのように行われてきたのか、その変遷をたどりました。

神戸女子大学名誉教授 阪口 弘之特別客員研究員は、近世芸能の視点から、「作者と編者―『かしま御本地』を事例に」と題して、作者によって生み出された浄瑠璃作品のテキストが、編者（本屋）を介することでいかなる変遷を遂げるか、実例を示しながら解き明かしました。

神戸女子大学名誉教授
阪口弘之特別客員研究員

神戸女子大学教授 川森 博司古典芸能研究センター長は、民俗芸能の視点から、「来訪神儀礼と「はじまりの芸能」」と題し、人の心にやすらいをもたらすしなやかな力のある古典芸能の背景として民俗芸能や沖縄祭祀を位置付け、来訪神（別世界から訪れる神）を例に挙げて紹介しました。

神戸女子大学教授
川森博司古典芸能研究センター長

講演会終了後は、来場者に、展示室で同時開催した「リニューアル記念展示」を非常勤研究員の解説によって見学していただきました。その際、貴重な能楽資料をセンターにご寄贈下さった手塚 稔子氏と伊藤 博氏へ中島 實学長より感謝状を贈呈しました。

講演の様子

手塚稔子氏

中島實学長と伊藤博氏

国際研究集会
見つめる能面・能面を見つめる

日時：平成 26 年 11 月 29 日（土）13:00～17:00
　　11 月 30 日（日）10:30～17:00
場所：神戸女子大学ポートアイランドキャンパス　B 館 403（AV ホール）
申込不要・入場無料
主催：神戸女子大学古典芸能研究センター研究プロジェクト
　　「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」

11 月 29 日（土）「国際的に多様な視点から能・狂言面を考察する」
プログラム：
狂言「三番三　鈴の段」
　三番三　茂山七五三、千歳　茂山宗彦
　笛　斉藤敦、小鼓　清水晧祐、大鼓　山本哲也
講演
「能面研究の射程」大谷節子（神戸女子大学教授・研究プロジェクト代表）
「韓国の仮面と仮面劇」李応寿（世宗大学校教授）
「中国の仮面と仮面劇」廣田律子（神奈川大学教授）
「ヨーロッパの仮面と仮面劇」Peter W. Marx（ケルン大学演劇学研究所所長）

11 月 30 日（日）「学際的に多様な視点から能・狂言面を分析する」
プログラム：
講演
「能面のような人―宗教学の視点から見る能面―」山折哲雄
　　（宗教学者・国際日本文化研究センター元所長）
シンポジウム「能面を科学する」
（司会）天野文雄
　（京都造形芸術大学舞台芸術センター所長・古典芸能研究センター客員研究員）
研究報告
「人類学の視点から見る仮面」吉田憲司（国立民族学博物館教授）
「民俗芸能の視点から見る仮面」宮本圭造（法政大学能楽研究所教授・古典芸能研究センター客員研究員）
「美術史の視点から見る能・狂言面」根立研介（京都大学大学院文学研究科教授）
「材料科学の視点から見る能・狂言面」高妻洋成（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長）
「演者の視点から見る能面」金剛永謹（能楽シテ方金剛流宗家）
討論者
　Julie A. Iezzi（ハワイ大学教授・古典芸能研究センター客員研究員）
　竹本幹夫（早稲田大学文学学術院教授）
　Stephen Marvin（能面収集家）
　杉山淳司（京都大学生存圏研究所教授）
　Monica Bethe（中世日本研究所所長）
　川森博司（本学教授・古典芸能研究センター長）
　大谷節子（本学教授・研究プロジェクト代表）

成果公開：
『能面を科学する：世界の仮面と演劇』
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』９号 PP43
『神女広報－CROSSROADS－』Vol.20 2015 夏
　※http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/public_rel/crossroads/pdf/crossroads_vol20_02.pdf

古典芸能研究センターからのお知らせ

国際研究集会

「見つめる能面・能面を見つめる」

神戸女子大学古典芸能研究センターは、平成26年11月29日(土)・30日(日)にポートアイランドキャンパスで、国際研究集会「見つめる能面・能面を見つめる」を開催しました。

この国際研究集会は、平成25年度文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択された当センターの研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」の一環として開催したもので、2日間で学内外延べ約160名の参加がありました。

狂言「三番三」(茂山七五三氏)

初日は、「国際的に多様な視点から能・狂言面を考察する」と題し、研究プロジェクト代表 大谷 節子教授による基調講演をはじめ、国内外の第一線で活躍する研究者による、仮面と仮面劇についての講演が行われました。講演の前に、本学初の国際研究集会開催にふさわしく、茂山 七五三氏・宗彦氏らによる狂言「三番三 鈴の段」が上演されました。また、会場内には、初日限定で、京都の片山家能楽保存財団所蔵の能面二面を展示し、来場されていた人間国宝の能役者 片山 幽雪氏が、飛び入りでその面の解説をしてくださいました。残念ながら、この日登壇予定であったドイツのケルン大学 ピーター・マルクス教授は体調不良で来日がかなわず、本学国際交流推進部長の海老 久人教授が予め頂戴していた講演原稿の日本語訳を代読しました。

ピーター・マルクス教授の原稿を代読する海老久人教授

2日目は、「学際的に多様な視点から能・狂言面を分析する」と題し、宗教学者 山折 哲雄氏の講演とシンポジウム「能面を科学する」が行われました。シンポジウムでは、当センター客員研究員 天野 文雄氏(京都造形芸術大学舞台芸術研究センター所長)の司会のもと、人類学、民俗芸能、美術史、材料科学の各学問分野の専門家が、演者を交えて、仮面そして能・狂言面について研究報告を行い、更に討論者を交えて討議しました。

宗教学者 山折哲雄氏

シンポジウム

韓国の仮面(李応寿教授ご所蔵)

神戸女子大学・神戸女子短期大学オープンカレッジ秋期講座

特別講座「場所の力—聖地・名所をめぐる伝承と芸能—」

期間：平成 26 年 10 月 22 日～11 月 19 日
　　毎週水曜と 11 月 22 日(土)見学会
時間：午後 2 時～3 時半

さまざまな芸能や文学は、特定の土地にまつわる伝承や、そこから発展した想像力をもとにして形づくられてきた。この講座では、「文学と芸能の発生」という視点から聖地・名所の意味を考え、神話・祭祀、和歌、能楽、説経、人形浄瑠璃などに見られる「場所の力」について考察する。見学会も加えて、古典芸能や古典文学の力を生き生きと実感し、新たな意味を噛みしめる機会としたい。

内容：

① 10 月 22 日
　沖縄における聖地と祭祀・芸能
　　髙阪　薫（古典芸能研究センター客員研究員・本学客員教授）

② 10 月 29 日
　和歌と住吉の神
　　北山円正（古典芸能研究センター兼任研究員・本学教授）

③ 11 月 5 日
　能楽における「場所の力」
　　大山範子（古典芸能研究センター非常勤研究員）

④ 11 月 12 日
　文学と芸能の発生—折口信夫の視点—
　　川森博司（古典芸能研究センター長・本学教授）

⑤ 11 月 19 日
　説経・浄瑠璃における「場所の力」—『信太妻』を中心に—
　　阪口弘之（古典芸能研究センター特別客員研究員・本学名誉教授）

〈見学会〉11 月 22 日（土）
　伝承のルーツを訪ねる—天王寺から熊野街道へ
　　コース：熊野街道来歴碑・松虫塚・安倍晴明神社・阿倍王子神社・信太森葛葉稲荷神社・聖神社
　　担当講師：川森博司　北山円正　阪口弘之

成果報告：
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』９号 PP37-50

【特別講座要旨】

「場所の力 ―聖地・名所をめぐる伝承と芸能―」

日時：二〇一四年一〇月二二日～一一月一九日と
一一月二二日（土）（見学会）

場所：神戸女子大学三宮キャンパス

〔各回の内容〕

一〇月二二日
沖縄における聖地と祭祀・芸能
高阪薫（古典芸能研究センター客員研究員）

一〇月二九日
和歌と住吉の神
北山円正（古典芸能研究センター兼任研究員・本学教授）

一一月五日
能楽における「場所の力」
大山範子（古典芸能研究センター非常勤研究員）

一一月一二日
文学と芸能の発生―折口信夫の視点―
川森博司（古典芸能研究センター長・本学教授）

一一月一九日
説経・浄瑠璃における「場所の力」―『信太妻』を中心に―
阪口弘之（古典芸能研究センター特別客員研究員・本学名誉教授）

一一月二二日
見学会「伝承のルーツを訪ねる―天王寺から熊野街道へ」

講座の趣旨

今回の講座「場所の力」は、特定の場所（聖地や名所）が芸能や文学のはじまり、そして発展にかかわってきたのではないか、という視点から、沖縄の聖地、和歌と歌枕、能楽における謡跡、説経・浄瑠璃における伝承の場と語り手などについて、それぞれの専門の視点から考えてみようとするものである。

最近、パワースポットという言葉が観光パンフレットなどで、よく使われるようになってきた。これは、特定の場所についての、神秘的な感覚、不思議な感覚、癒される感覚など、われわれが何となく直感的に感じている雰囲気のようなものを表現する言葉として、現代人に受け入れられているようであるが、われわれの心を揺さぶる文学や芸能も、そのような土地にまつわる想像力をその原点にもっている場合が多いのではないだろうか。

その土地がもともともっていた自然環境とその場所に人々が寄せてきた想像力の積み重ねが相俟って、独特の雰囲気を作り出している「場所の力」の様相を解き明かし、古典芸能や古典文学の力を生き生きと実感し、新たな意味を噛みしめる機会としたい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

沖縄における聖地と祭祀・芸能
―御嶽とノロの力―

高阪　薫

講演にあたり、四十年余にわたる沖縄と私の関わりを話した。

まず沖縄戦で反戦抵抗したキリスト者・ウチナンチュ（沖縄人）の話、その後四十年にわたる沖縄祭祀の民俗調査について、そして古典「おもろさうし」の出会いと現代沖縄文学の研究など、振り返って述懐し、沖縄への強い思い入れを話した。

当日、本学古典芸能研究センター展示室では、沖縄祭祀の写真展を開催していたので、それを観賞していただく。講演では、資料とパワーポイントを使って代表的な祭祀の事例過程を話した。「久高島イザイホー」や、各離島・村落の「シヌグ・ウンジャミ」の祭りや「豊年祭」などを、写真・動画を使って解説した。すでに本学古典芸能研究センターでは、私たちの沖縄祭祀の記録写真約八、五百余葉が、島々ごとに分類されて、インターネットを通じデータ配信されている。祭り細部の話はそれを利用して進めていった。

当日の主題は、「祭祀の場の力」、即ち沖縄「御嶽の場の力」についてである。まず「御嶽」（ウタキ・オン）とはなにか、御嶽で祭祀を司る「ノロ」（神女）とはなにか。その機能と役割について関連写真を用いて解説した。御嶽とノロの歴史や祭祀過程での関係性はどうなのか。また全体の場としてノロ自身と御嶽の周辺環境が、祭りに必要な霊的「力」即ち聖域の場に「霊力」を生み出し、その霊力をもって、祭祀行事が遂行される過程を説明した。

御嶽の場の力ということは、祭祀において必要な不可視の霊力を祭りの場にもたらし、聖域の祭場にいる人々がその神秘性を感受できるかどうかであろう。信仰というものが、いずれの宗教においても秘儀的「霊力」を感受でき、霊験あらたかなることが大きな意味を持つ。沖縄の御嶽とノロが醸す霊力は果たしてどこから創生されるのか。その点に関して、三点から追究した。まず①は、なによりも御嶽の聖域にあってノロ自身のもつセジ（精・霊）の能力である。いわゆる「カンガカーリ」（神憑り・憑依現象・トランス）である。これについて文化人類学・心理・民俗学的観点から考察し、沖縄の場合、万物霊魂のアニミズム的要素の影響が強いことを説明した。それを受けて②は、御嶽の周辺環境が霊力を受け入れる植物（クバ・九年母・仏桑華等々）に囲まれ、一木一草にアニミズムの霊威をみなぎらせる雰囲気を醸していること。それぞれの草木花の霊威にまつわる具体例は、フィールドでの話と写真、「おもろさうし」や、歴史資料・民話伝承を利用した。そして③は、古代からの「オナリ神」信仰である。ノロは八～九世紀から存在していて、家のオナリ神信仰から始まるとされる。家・村落の守護神としての活動が、琉球王朝によって十五世紀末「神女制度」が生じ公儀ノロとなる。王朝支配に組み込まれて世襲的につながり、明治三十二年まで続く。ノロは、自然発生的な自律的信仰の経緯をへて、王権の人為的権威からの他律的な畏怖と崇敬を継承してきた背景がある。かくて聖域の場の霊力を醸す要素は、ノロのセジ能力、アニミズムの霊威、王威につながるノロの権威、などであり、御嶽・聖域での相乗作用・効果を通じて「場の力」を生み出していた。

ノロは、不可視の神を見て、神憑りをし、祭祀の場に降臨して、人々に神口（カンフツ・オタカベ・ミセセル）を唱え、豊穣・豊漁など島人の幸せを、祈り拝むのである。お祈りする不可視の絶対の神の正体はなにか。かつて沖縄に七～八百箇所あった御嶽は、

沖縄戦で喪失し、現在ノロも殆どいなくなった。とはいえ、島々の祭祀行事は繋がり、たとえ王位・王権に基づく創世神アマミキヨ或いはテダ（太陽）等への儀礼的信仰は行われないにしても、信仰対象は今も厳然として祖先崇拝と、海上の彼方から豊穣と幸をもたらすというニライカナイの神世界が中心であることは間違いない。

いろいろな要素が沖縄祭祀の場の力を形成していると思われるが、もちろん祭りの中心はウチナンチュ・シマンチュ（島人）である。島人の御嶽・信仰へのモチベーションやテンションが高くなければ、霊験あらたかな祭祀の効果・信仰のありがたさももたらせられない。

現代の沖縄でも、祖先崇拝とニライカナイの信仰は続いており、御嶽は重要な宗教的役割を担っている。折から「普天間空港」の返還をめぐって沖縄の人々の必死の戦いがみられる。空港基地内にある「御嶽」は年一回の清明祭しか入れてもらえない。普段はフェンス外から拝む光景がみられる。芥川賞作家・大城立裕の「普天間よ」という小説にも描かれる。

このように御嶽は、古代から現代まで、沖縄の人々にとって、心と生活を支える聖地である。御嶽は祭祀の場として、祖先崇拝、ニライカナイ、垂直、水平の神々の降臨する場であり、交信する場であり、神女の霊力を更新する修業の場でもある。御嶽や祭祀は、忘却されつつある沖縄の自然と故郷を蘇えらせ、生き物と霊性を畏怖する心を想起させる敬虔な霊場・祭場として復活し、いまも確固として沖縄の人々の心根にある。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

和歌と住吉の神

北山　円正

＊後掲（44～50頁）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

能楽における「場所の力」
―高砂・須磨・阿倍野―

大山　範子

講義では、「場所」を特別な聖域や名所ではなくさまざまな土地ととらえて、能、就中、神や死者の霊を主人公とするタイプの「夢幻能」と関わらせ、以下の二つの方向から考察した。

一つは、能を生み出した（能の利用した）「場所の力」である。これは、また人間の生に即して見るなら、直接係わるもの即ち土俗的・歴史的な側面と、間接的なもの即ち文化的・文学的な側面とに分けて考えることもできるだろう。もう一つは逆に、能の生み出した「場所の力」である。具体的には、文字通りの史跡ではなく、史実に即しているとは云えないことも多い謡跡や文学遺跡などが含まれる。この二つの力は、相互作用で互いにパワーを強めあう面もある。

今回述べたかったのは、能の作品は、それぞれの場所から力を得て作られ、逆にまた、そうした作品が場所（＝土地）に力を与えてきたということである。具体的な土地・作品として、高砂という地と能《相生》（「高砂」の古称）、須磨と能《忠度》、そして見学会で訪れる阿倍野に係わる《松虫》の三つの夢幻能をとりあげた。ちなみに、これらの能はどれも人間ならざる者が主人公で

あり、主人公に関しては、それぞれ、①過去に実在した人物の霊の場合（《忠度》）、②非実在の人物の霊の場合（《松虫》）、そして、③神の場合（《高砂》という三つのパターンの例ともなっている。高砂・須磨は古くから和歌に詠まれ、歌枕としても知られていた。のみならず、高砂と阿倍野は『古今和歌集』の仮名序で言及されており、中世にはその注釈によって説話世界が展開されていた。須磨は行平伝説や『源氏物語』の舞台として名を馳せていたし、阿倍野はまた、古くからの交通の要地でもあった。土地にまつわるこうした様々な力をもとに生み出されたこれらの能は、それ自体が人々に共有され、土地の新たな伝説として育っていったのである。

****

文学と芸能の発生
—折口信夫の視点—

川森　博司

折口信夫（一八八七～一九五三）は「発生」という視点から日本の古典文学や古典芸能の意味を考察した国文学者・民俗学者である。その考察においては、文学や芸能が発生する「場所」の問題が重視される。その場所は「人間界」と「他界」をつなぐ場所であり、その両者を媒介するのが「まれびと」である。

都に対する他界を象徴する場所として想定されたのが「熊野」であった。その意味で熊野は文学・芸能におけるインスピレーションの源となり、さまざまな作品が生み出された。その代表的なものとして、説経節『小栗判官』がある。武蔵国横山党の乙姫、照手への押しかけ聟の作法により毒殺された小栗が餓鬼身として生き返り、妻照手の助力もあって熊野本宮湯の峰温泉の「つぼ湯」で蘇生するという物語で、この説話でも熊野はこの世とあの世の境界に位置する場所としての位置づけを与えられている。

この熊野と都をつないだ道が熊野街道であり、阿倍野（安倍野）はその街道筋に位置していた。古代・中世において人間界と他界を仲介する役割をつとめた陰陽師を代表する安倍晴明は、この「あべの」出身で、晴明の母は信太から来た狐の化生であったという「信太妻」の伝承がある。折口は、この物語の発生を四天王寺か住吉の神宮寺に所属した寺奴である「安倍野童子」の漂泊布教に求めた。つまり、都と熊野をつなぐ交通の接点から、語り物の文学が生まれたとするのである。

このような点から、伝承のルーツ（roots 根）は人間界と他界をつなぐルート（routes 経路）にあるといえる。そのような場所に結びついた語り物を開くことによって、人々は語り手（演者）とともに日常的・意識的な自我を超えた深い世界に出会うことができる。今日、古典芸能に接して得られる感動も、このような想像力の世界に根をもっていると考えることができるのである。

****

説経・浄瑠璃における「場所の力」
—『しのだづま』を中心に—

阪口　弘之

『しのだづま』の物語は「こひしくば　たづねきてみよ　いづ

みなる　しのだのもりの　うらみくずのは」の歌でよく知られる。平成十五年頃の陰陽師ブームでは、物語舞台が現代の闇を照らすパワースポットとして人気を集めた。

今、私たちがよく知る物語は、延宝頃に作られた浄瑠璃で、前半は安倍保名と狐との異類婚姻譚で、二人の間に生まれた童子との愛別離苦が哀れを誘う。後半はその童子が成長して名を晴明（清明）と改め、当代一の陰陽師、芦屋道満との行力較べに勝つ。これが後に『芦屋道満大内鑑』へと展開する。

『しのだづま』では童子と父が信太の森に母狐を探し求める三段目が白眉である。その信太の森にあるのが和泉の聖（ひじり）神社である。「日（ひ）」を「知る」神社で、暦に関わる。「葛の葉」子別れと称されるこの場面で、母狐は童子に霊力を授けるべく四角い黄金の箱と水晶のように輝く丸い玉を渡す。箱のなかには竜宮世界の秘符が入っていて、世界の万象に通暁できる。玉は鳥獣の言葉を理解できる。この四角い箱と丸い玉。これらを用いて晴明は道満に勝つのであるが、これこそ陰陽家で大切にされた「簠簋（ほき）」をイメージしたのであろう。「簠」は四角い容器。「簋」は丸い容器。それぞれ四角い大地と丸い天をあらわし、陰陽家の祭祀に用いられて、日月の運行を知る秘具となる。中国の「天円地方」の思想を反映したもので、物語の最も根幹を成すところである。

日月を知ること、それはとりもなおさず未だ知られざる世界を予見することである。それを生業とした陰陽師を土御門家が支配下に置いた近世のはじめ頃、『しのだづま』や仮名草子の『安倍晴明物語』などが生み出されたらしい。これらの作品には、したがって天文や暦数に関わる古くからの考え方が盛り込まれている。「信太明神」と言われた聖神社は、「簠簋」などの暦数の知識を持った人々が信奉したのであろう。更にそこにつながった人々が「舞暦」などを売る便法に、舞の一節を語ったり舞ったりした。こうして、この物語が伝播をみたのであろう。

『しのだづま』の場合、その内容からいって、古いテキストが存在してもよさそうで、事実、これを古い説経と見做す考え方も有力であるが、現在、延宝を遡る正本は伝わらず、やはり十七世紀末、諸国の陰陽師の統括を意図した安倍土御門家の利権主張に絡んで生まれた物語とみるのがよいように思う。

こうした点は、既に晴明神社御鎮座壱千年記念出版『安倍晴明公』（講談社）で述べたところであるが、今回の講座では、特に和泉の聖神社に焦点を当てて、私見を紹介した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

見学会報告

「伝承のルーツを訪ねる
―天王寺から熊野街道へ―」

大山　範子

日　時：十一月二十二日（土）十三時～十六時頃

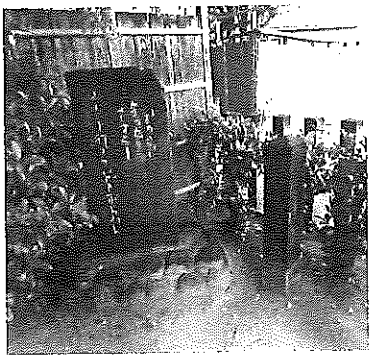
コース：松虫塚→安倍清明神社→阿倍王子神社
→北畠顕家卿之墓→住吉大社

担当講師：阪口弘之・北山円正・川森博司

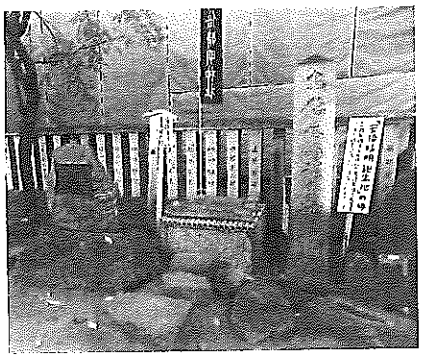
オープンカレッジ特別講座「場所の力　聖地・名所をめぐる伝

承と芸能―」では、昨年に引き続き、特別企画として講座の中で話題となった場所を訪れる見学会を開催しました。自由参加ながら、三十人余りの参加がありました。

当日は、爽やかな秋晴れの中、定刻前に全員が揃い、地下鉄に乗って出発しました。天王寺駅で下車し、出口を出て地上に上がると、そこはそのまま阪堺電車のホームで一同吃驚。素朴な路面電車や停留所が懐かしいと写真撮影をする人もあり、賑やかに電車に乗り込みました。


松虫塚

松虫駅で降車、歩いて松虫塚に向かいます。この近辺は小さな古墳が多い地域らしく、松虫塚も実はその一つとか。ここは新旧複数の塚が建っており、看板の説明には、能「松虫」に基づくという説のほか、複数の伝説が記されています。

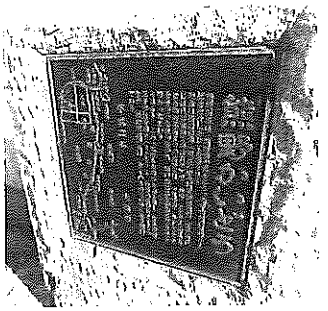
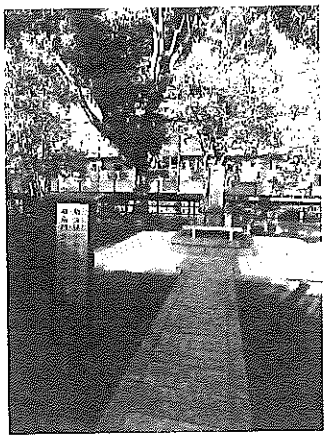

安倍清明神社境内

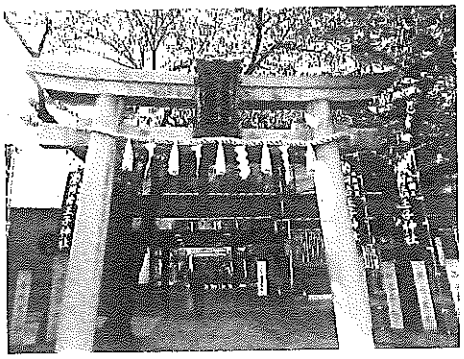
続いて徒歩で、安倍晴明生誕の地と伝えられる安倍晴明神社へ。平成十七年に晴明公一千年祭を迎えて整備された境内は、思いの外こじんまりとしており、安倍晴明公産湯井の跡、葛の葉霊狐の飛来像などがあります。また、朝廷の陰陽寮以来の造暦の伝統を守る、本暦も売られていました。

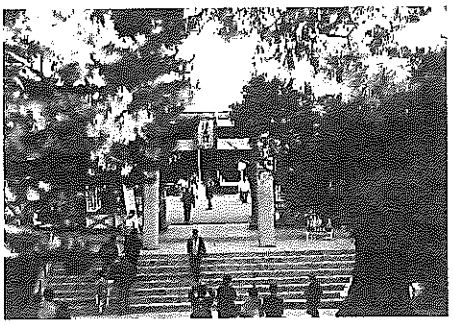
続いて安倍晴明神社を管轄する阿倍王子神社へ。ここは、四天王寺と住吉大社のほぼ中間に位置しており、熊野詣をする人々が途中で立ち寄る遥拝所兼休憩所であった「王子」の跡とされています。

トイレ休憩の後、神社を出て、旧熊野街道に沿って阿倍野散策です。しばらく南へ歩いて北畠公園へ到着。ここには北畠親房の子、顕家の墓と伝えられる墓碑があります。碑を見学し、北山講師の解説を聞きました。

再び阪堺電車に乗り、最後の見学地、住吉大社へ。住吉大社については講座の第二回で詳しく触れられたので、さまざまな関心や期待を抱いていた参加者が多かったようです。ここは摂津国の



伝北畠顕家之墓


阿倍王子神社



反橋の上から見た住吉大社正面

一の宮ですが、各地の住吉神社の総本社でもあり、全国から奉納された燈籠が境内の外まで延々と並んでいます。広さに圧倒されながら鳥居をくぐり、反橋へと進みます。この橋は川端康成の小説「反橋」にも登場することを川森講師が紹介し、その一節を朗読後、そろって本殿前へ。お参りをし、阪口講師の話の後は、境内を自由に散策しました。

再集合後、境内にある「御文庫」（住吉大社御文庫）の前を通りかかり、予定にはありませんでしたが、外観を見学。阪口講師の解説を聞きました。ここは江戸時代に三都の書肆（出版社）によって創建され、大坂近郊で出版された初版本のほとんどが奉納されてきた大切な蔵です。

その後、境内末社の一つである「種貸社」を見学、この住吉大社に祈願して誕生した一寸法師の、お椀の舟と箸の櫂の作り物の前で一同、記念撮影をして解散しました。

住吉大社御文庫

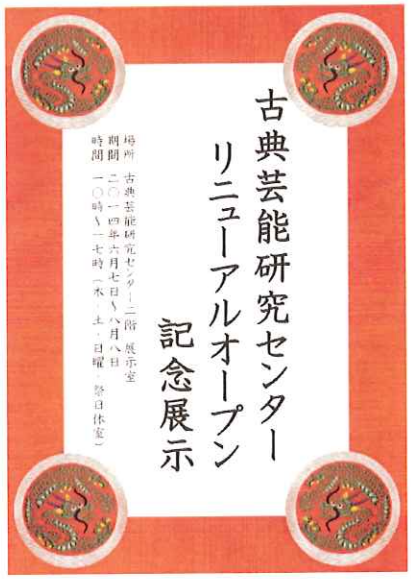
志水文庫の浮世絵

平成 26 年 4 月 7 日～5 月 30 日

特別展
リニューアルオープン記念展示

平成 26 年 6 月 7 日～8 月 8 日

目録公開：
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2014/openkinen.pdf



写真展
沖縄の祭祀 1978-2013

平成 26 年 8 月 27 日～11 月 19 日

特別展
仮面の芸能・人形の芸能

平成 26 年 11 月 25 日～12 月 26 日

目録公開：
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2014/kamennogeinou.pdf

企画展
涅槃図の世界

平成 27 年 2 月 9 日～4 月 3 日

目録・図版公開：
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2015/nehanzu.pdf
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/2015a-ichiran.html

神戸女子大学古典芸能研究センター紀要　９号

編：神戸女子大学古典芸能研究センター
頁数：162 頁
発行日：2015 年 6 月 30 日

目次：

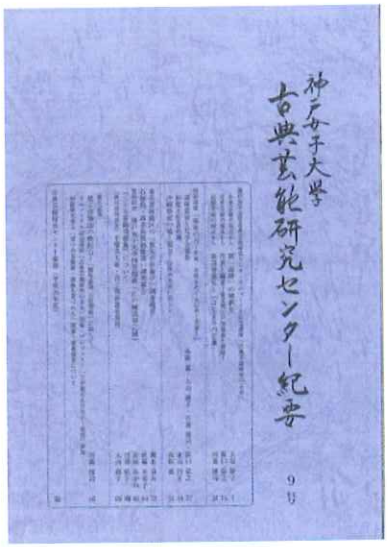
神戸女子大学古典芸能研究センターリニューアル記念講演「古典芸能研究の未来」
　中世芸能の視点から　能「高砂」の解釈史　　大谷節子　p. 1
　近世芸能の視点から　作者と編者—寛文期江戸浄瑠璃と書肆—　　阪口弘之　p. 15
　民俗芸能の視点から　来訪神儀礼と「はじまりの芸能」　　川森博司　p. 31

特別講座「場所の力—聖地・名所をめぐる伝承と芸能—」
　講演要旨と見学会報告　　高阪 薫・大山範子・川森博司・阪口弘之　p. 37
　和歌と住吉の神　　北山円正　p. 44
　沖縄における聖地と祭祀・芸能　　高阪 薫　p. 51

東京都板橋区の「徳丸の田遊び」調査報告　　梶木良夫　p. 78
石垣島・西表島祖納後追い調査報告　　武藤美也子　p. 84
資料紹介　神戸女子大学図書館蔵「江戸城謡初之図」　　長田あかね　p. 88
『二十五菩薩功徳集』について　　川端咲子　p. 106
〈新収資料紹介〉手塚亮太郎・貞三関係能楽資料　　大山範子　p. 126

〈報告記事〉
　見立涅槃図の喚起力—「横尾忠則　大涅槃図展」に即して—　　川森博司　p. 147
　リニューアル記念講演「古典芸能研究の未来」開催
　プロジェクト「大学都市ＫＯＢＥ！発信」参加
　国際研究集会「みつめる能面・能面を見つめる」開催・蔵書検索について

古典芸能研究センター彙報（平成二十六年度）　p. 157



平　成　２７　年　度

平成２７年度
特 別 企 画

神戸女子大学古典芸能研究センター公開研究会
説経節―情念の語り物―

日時：平成 27 年 11 月 28 日（土）10:30～16:30
場所：神戸女子大学教育センター5F 特別講義室
申込不要・入場無料
主催：神戸女子大学古典芸能研究センター研究プロジェクト
「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」

説経は煙滅して久しい。しかし、これほど日本人の心を捉えた語り物も珍しい。安寿とつし王、苅萱道心と石堂丸、しんとく丸と乙姫、誰もが一度は耳にした哀しくなつかしい物語である。街道筋を往還した語り物は、涙を滲ませて文字化され、絵巻や奈良絵本までもが生み出された。人智を超えるたくましい想像力が、日本人の情念を揺り動かした。説経研究の第一人者たちが、最新の成果を披瀝して、今後の研究動向をも見定めようとする企画である。

プログラム：
実演と講演
「絵解きと説教」沙加戸弘（大谷大学名誉教授）
講演
「語り物としての説経―その歴史をたどりながら」阪口弘之（古典芸能研究センター特別客員研究員・神戸女子大学名誉教授）
研究発表
「説経の基層―唱導説話からのアプローチ」小林健二（古典芸能研究センター客員研究員・国文学研究資料館教授）
「絵画化された説経―絵巻、奈良絵本のさまざま」川崎剛志（古典芸能研究センター客員研究員・就実大学人文科学部教授）
「説教者と身分的周縁」塚田孝（大阪市立大学大学院文学研究科教授）
「諸国の説経芝居」和田修（早稲田大学文学部准教授）

成果公開：
『説経　人は神仏に何を託そうとするのか』（神戸女子大学古典芸能研究センター叢書 3）
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』10 号 PP163-165
『神女広報－CROSSROADS－』Vol.22 2016 夏
※http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/public_rel/crossroads/pdf/crossroads_vol22_02.pdf

神戸女子大学古典芸能研究センター公開研究会

「説経節―情念の語り物―」報告

井上勝志

二〇一五年十一月二十八日（土）、三宮キャンパスの神戸女子大学教育センター五階特別講義室において、公開研究会が開催された。神戸女子大学古典芸能研究センター研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」の一環であり、題して「説経節―情念の語り物―」であった。午前十時三十分、川森博司センター長の開会挨拶で始まった。はじめに、プログラムを記す。

【実演と講演】

「真宗寺院における教化の展開―絵解きと説教―」

沙加戸弘 先生（大谷大学名誉教授）

【講演】

「語り物としての説経―栄華循環の神仏利生譚」

阪口弘之 先生

（古典芸能研究センター特別客員研究員・神戸女子大学名誉教授）

【研究発表】

「説経の基層―唱導説話からのアプローチ―」

小林健二 先生

（古典芸能研究センター客員研究員・国文学研究資料館教授）

「絵画化された説経―絵巻・奈良絵本のさまざま」

川崎剛志 先生

（古典芸能研究センター客員研究員・就実大学人文科学部教授）

「説教者と身分的周縁」

塚田 孝 先生（大阪市立大学大学院文学研究科教授）

「諸国の説経人形芝居」

和田 修 先生（早稲田大学文学部准教授）

まずは、沙加戸弘先生による「真宗寺院における教化の展開―絵解きと説教―」である。御文の成立から、明治十年の「絵解」禁止令までの展開を、要点を押さえて辿られた。時折、「絵説」と「絵解」との違いなど、実演を交えながらの講演であり、ここが説教の場であるかのような錯覚に捕らわれた聴衆もいたのではなかろうか。『さんせう太夫』にしろ、『をぐり』にしろ、芸能としてのみ見がちだが、そもそも「説く」「解く」ということが宗教的営為であったことを再確認させていただいた。

続いて、阪口弘之先生は「語り物としての説経―栄華循環の神仏利生譚」と題して、その成立基盤をも示す、律宗僧らの宗教活動拠点を繋いで、主人公の漂泊流浪の旅が語られていた、語り物時代の説経を中心に、説経が文字化（正本化・読物化）され、周縁ジャンルにも影響を与えた時代までのことを、新出資料も紹介されながら、お話になった。説経が生成される場、説経に携わった者たちにまで目配りされ、説経とは何たるか、という本質を示され、その上で、書肆も絡んでの、説経の近世化ということに及んだ講演であった。

昼休みを挟んで、午後は研究発表が四本であった。

小林健二先生の「説経の基層―唱導説話からのアプローチ―」は、近年の法華経注釈書研究の進化に伴い、中世芸能の典拠としての唱導説話に注目されたものであった。『直談因縁集』の説話世界と、能《雲雀山》や「さよひめ」とが、継母による継子迫害や親の回忌供養のための身売りという点で通じることなどを具体的に示され、説経の基層として説法唱導の場があったことを論じられた。古浄瑠璃も含めて、説経の研究において、近世芸能・文学の研究者のみならず、中世芸能・文学の研究者も交えた活発な議論は不可欠であり、そのことによって新たな視点が獲得されるに違いない。

川崎剛志先生の「絵画化された説経―絵巻・奈良絵本のさまざま」は、現存する説経の絵巻・奈良絵本を、説経史、絵巻・奈良絵本史、双方の視点から俯瞰された。その上で、説経が本領安堵と末繁昌の物語であることから、武家から個別に求められて、寛永期以降、説経に取材した絵巻・絵本が制作されたとの見解を示された。中でも、伝岩佐又兵衛画『をぐり』絵巻の道行部分の表現に着目されて、その特質を述べられた。語りの場と距離を置いた、説経享受の一側面に光が当てられた。

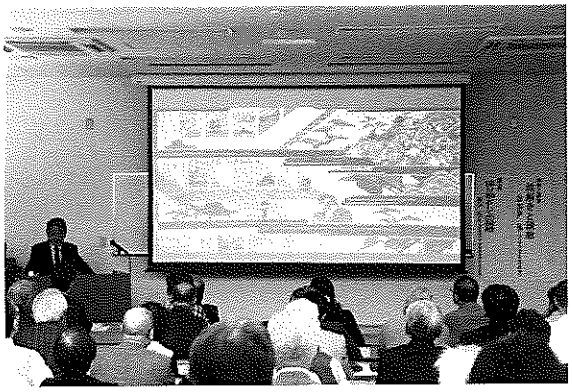
塚田孝先生の「説教者と身分的周縁」は、芸能者の社会的位置についてまとめられたものであった。信州下伊那のささら（説教者）を例として、地方では関蟬丸神社と説教者との関係が十九世紀においても継続し、展開していたこと、一方、大坂では宮地芝居の説教名代として定着していたが、それらは芸能と関係のない者たちであったことなど、多くの史料を挙げて示された。芸能・文学の研究が歴史研究と緊密な関係にあることは言を俟たないが、その成果を芸能・文学研究の側としては、どのように取り込んでいくかを考えなければならないだろう。

和田修先生の「諸国の説経人形芝居」は、映像資料も併用しながらの発表であった。江戸時代までは多数の座が存在した佐渡の説経人形は、明治以降、文弥節の語りとなっていったこと、薩摩若太夫などの後期江戸系説経としては、八王子・多摩の車人形や秩父の串人形、一人遣い人形などがあること、岡本美根太夫に始まる説教源氏節の流れを汲むものとして、愛知県の「もくもく座」、広島県の眺楽座が活動中であること、および、これらを取り巻く芸能環境について述べられた。近世化を経た説経の、更なる空間的、時間的拡がりを捉え、現代の我々が実際に触れ得る「説経」の姿が提示された。

各先生、四十五分という持ち時間であったが、よくぞこの時間に収められた、と驚くほどの高密度な講演であり、研究発表であった。さらに言えば、どの先生のテーマであっても、一日分の催しとして成立するであろうと思われる講演、研究発表が、都合六本も並んだ。「説経研究の第一人者たちが、最新の成果を披瀝して、今後の研究動向をも見定めようとする企画である」とちらしにあったとおり、説経という芸能を多面的に捉えた、稀有と言ってよい、学会レベルの「研究会」であった。

それゆえに、当日の会場でだけでは消化しきれないという点もあったかもしれない。あるいは、それほど有意義な公開研究会に当日参加できなくて残念だ、という方には朗報である。本研究会

は冒頭に記した研究プロジェクトの一環であり、その成果刊行物として、当日の講演・研究発表を中心として、書籍化されると聞く。よって、従前の講演会ではそうであったが、今回は講演録という形では一本も本紀要には掲載されない。そこで、先生方の講演・研究発表の内容を粗々まとめて、拙い報告とする。しかし、本報告が、先生方の趣意を理解できていない、取り違えている、ということを畏れるから、という消極的理由だけではなく、現在において最新にして、最高の説経研究の到達点を示すものになることは間違いない。書籍としてまとめられる、各先生方の御論考をぜひお読みいただきたい。



神戸女子大学・神戸女子短期大学オープンカレッジ秋期講座

特別講座「説経節―人は神仏に何を托そうとするのか―」

期間：平成 27 年 10 月 14 日～11 月 18 日
　　毎週水曜・全６回
時間：午後 2 時半～4 時

説経作品は数多くはない。街道筋にあぶくのように生まれては消え、生まれては消え去る中、人々の魂を揺さぶった物語のみが今日に伝わる。人はこれを漂泊流浪・愛別離苦の物語という。病者として差別を受け、土車に乗せられても復活を夢み、出家遁世を遂げても、あるいは自ら身を売っても、あるいは殺され地獄に落ちても、なお俗世の淵をのぞき込む。「さんせう太夫」「かるかや」「小栗」など、その情念の深さが日本人の心に沁みわたる。人は神仏に救いを求め、時にその神仏さえも脅す。人と神仏のぎりぎりのやり取り、その生死の境涯を呻くように語り出すもの、それが説経である。本講座は説経の代表作を各専門家が独自の視座を設けて照射して、その本質に迫ろうとするものである。

内容：

① 10 月 14 日
　説教から説経へ
　　小林 直樹（大阪市立大学大学院文学研究科教授）

② 10 月 21 日
　「さんせう太夫」の物語 ―肌の守りの地蔵菩薩と氏系図―
　　井上 勝志（古典芸能研究センター兼任研究員・神戸女子大学文学部教授）

③ 10 月 28 日
　「かるかや」の物語 ―四国の弘法大師伝承との関係―
　　武田 和昭（真言宗 七宝山 円明院住職）

④ 11 月 4 日
　「松浦さよ姫」の物語 ―人身売買と人身御供―
　　阪口 弘之（古典芸能研究センター特別客員研究員・神戸女子大学名誉教授）

⑤ 11 月 11 日
　「小栗判官」の物語
　　川端 咲子（古典芸能研究センター非常勤研究員）

⑥ 11 月 18 日
　折口信夫の説経研究
　　川森 博司（古典芸能研究センター長・神戸女子大学文学部教授）

成果公開：

『説経　人は神仏に何を託そうとするのか』（神戸女子大学古典芸能研究センター叢書 3）
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』10 号 PP166-167

【特別講座報告】

古典芸能研究センター特別講座

「説経節―人は神仏に何を托そうとするのか―」

日時：二〇一五年一〇月一四日～一一月一八日（水）
午後二時半～四時　全六回
場所：神戸女子大学教育センター（三宮キャンパス）

〔各回の内容〕

①一〇月一四日
説教から説経へ―西大寺流律僧の説話世界を軸に―
小林直樹（大阪市立大学大学院文学研究科教授）

②一〇月二一日
「さんせう太夫」の物語―肌の守りの地蔵菩薩と氏系図―
井上勝志（古典芸能研究センター兼任研究員・神戸女子大学文学部教授）

③一〇月二八日
「かるかや」の物語―四国の弘法大師伝承との関係―
武田和昭（真言宗 七宝山 円明院住職）

④一一月四日
「松浦さよ姫」の物語―人身売買と人身御供―
阪口弘之（古典芸能研究センター特別客員研究員・神戸女子大学名誉教授）

⑤一一月一一日
「小栗判官」の物語―おぐり断片―
川端咲子（古典芸能研究センター非常勤研究員）

⑥一一月一八日
折口信夫の説経研究―説経と現代をつなぐもの―
川森博司（古典芸能研究センター長・神戸女子大学文学部教授）

講座の趣旨

説経作品は数多くはない。街道筋にあぶくのように生まれては消え、生まれては消え去る中、人々の魂を揺さぶった物語のみが今日に伝わる。人はこれを漂泊流浪・愛別離苦の物語という。病者として差別を受け、土車に乗せられても復活を夢み、出家遁世を遂げても、あるいは自ら身を売っても、あるいは殺され地獄に落ちても、なお俗世の淵をのぞき込む。「さんせう太夫」「かるかや」「小栗」など、その情念の深さが日本人の心に沁みわたる。人は神仏に救いを求め、時にその神仏さえも脅す。人と神仏のぎりぎりのやり取り、その生死の境涯を呻くように語り出すもの、それが説経である。本講座は説経の代表作を各専門家が独自の視座を設けて照射して、その本質に迫ろうとするものである。

〔全体の報告〕

二〇一五年度の古典芸能研究センター特別講座（神戸女子大学・神戸女子短期大学オープンカレッジ秋期講座において開講）は、説経節をテーマに六回にわたって行い、毎回、大勢の受講生が参加し、盛況のうちに終了した。各回の講義の概要は、およそ以下の通りとなる。

初回の小林直樹氏は、講座の導入とも言うべき内容で、説経を生み出す土壌を作り上げた叡尊などの西大寺流律僧が、どのような信仰世界を元に説教を行っていたのかを考証された。

続く第二回から第五回までの講義では、各回ごとに説経が一作品ずつ取り上げられ、講師それぞれが作品別に様々な研究課題をめぐり考察を繰り広げられた。井上勝志氏は、「さんせう太夫」について、もともとは金焼地蔵の本地譚としての正氏の物語が含まれるなど、現存する正本よりも長大なエピソードで構成されていたとする見解を示された。武田和昭氏は、「かるかや」の「高野巻」の形成に、四国在地の時宗系高野聖によって作られ高野山に伝えられた『弘法大師空海根本縁起』が影響したとする論を、四国遍路の歴史から丁寧に説き起こされた。阪口弘之氏は、「さよひめ」の諸本のうち、広本に分類されるフランクフルト本（奈良絵本）と説経正本の系統関係を整理され、さらに説経浄瑠璃本（六段本）の成立についても新説を提示された。川端咲子氏は、説経「小栗判官」と十王像との関係、後世の芸能作品における小栗の餓鬼阿弥姿の消失、志水文庫蔵の奈良絵本「おくり」零葉の紹介など、説経「小栗判官」に関わる諸問題を多岐に取り上げられた。

最後の川森博司氏は、折口信夫の著述を中心に現代における説経作品の再解釈・再評価のあり方を考察され、最終回にふさわしい示唆に富む内容で講座が締めくくられた。

いずれの講義においても、最新の研究成果がわかりやすく説明され、講義終了後には、常に講師と熱心な受講者の間で活発な質疑応答が交わされた。

尚、本年度の特別講義の内容は、同じ秋に開催された公開研究会「説経節―情念の語り物―」の内容とともに、最新の説経研究をテーマとする書籍にまとめられ、古典芸能研究センターで現在継続中の研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」（文部科学省平成二十五年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」採択）の成果刊行物として、二〇一七年二月に和泉書院より発刊予定である。

来迎の姿—練供養と来迎図—

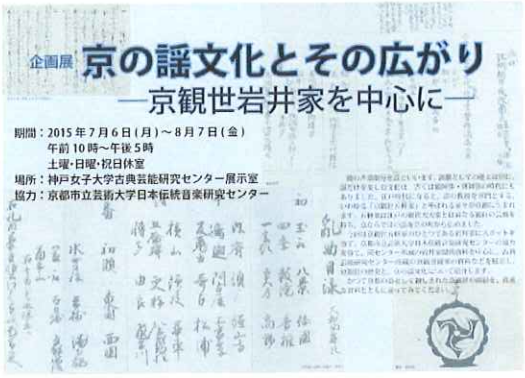
平成 27 年 5 月 11 日～6 月 26 日

目録・図版公開：
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2015/2015bmokuroku.pdf
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/2015b-ichiran.html

企画展
京の謡文化とその広がり—京観世岩井家を中心に—

平成 27 年 7 月 6 日～8 月 7 日

目録公開・報告：
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2015/2015cmokuroku.pdf
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』10 号 PP189



企画展
説経「おぐり」の世界—説経節の広がり—

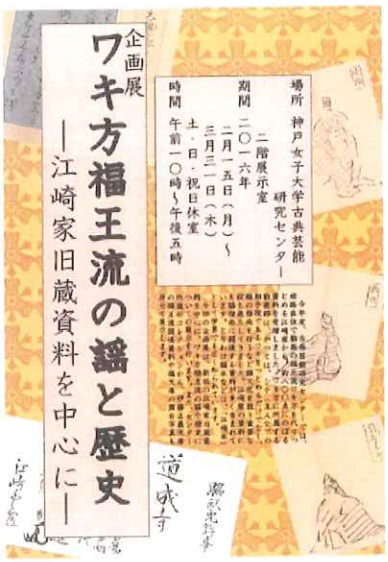
平成 27 年 10 月 13 日～12 月 11 日

目録・図版公開：
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2015/2015dmokuroku.pdf
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/2015d-ichiran.html

企画展
ワキ方福王流の謡と歴史―江崎家旧蔵資料を中心に―

平成 28 年 2 月 15 日～3 月 31 日

目録公開：
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2016/2016amokuroku.pdf
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』10 号 PP168-188
『神戸女子大学古典芸能研究センター企画展
「ワキ方福王流の謡と歴史―江崎家旧蔵資料を中心に―」展示目録（増補版）』



企画展「京の謡文化とその広がり ―京観世岩井家を中心に―」報告

二〇一五年七月六日から八月七日まで、京観世五軒家のひとつである岩井家にスポットを当てた企画展を、古典芸能研究センター展示室において開催した。京観世五軒家とは江戸時代に京都で生まれた謡の教授を専門とする家々のことで、江戸の観世大夫家とは異なる独自の芸風や技法を京の町に育み伝えた。今回の企画展では、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターの協力を得て、同センター所蔵の岩井家関係資料を中心に、古典芸能研究センター所蔵の京観世薗家の資料なども紹介し、かつて京都で親しまれた京観世の歴史が辿れるよう、以下のⅠ～Ⅳの構成に沿って展示を行った。

Ⅰ　福王流と京の素謡界
Ⅱ　京観世岩井家の歴史
Ⅲ　京観世薗家の歴史
Ⅳ　近代における京観世

このうち、展示の中心となるⅡについては、日本伝統音楽研究センター「京観世の記録化」プロジェクト研究会による研究活動の一環として、二〇一三年一〇月三日から二月末日まで、同センター七階展示スペースにおいて催された「京観世岩井家の歴史展」に基づいている。

全五十一点の展示資料のうち、日本伝統音楽研究センターからは、謡曲地拍子の理論書である「老陽之拍子秘訣（信伊本）」、元禄三年山本長兵衛刊外組百番の刷り題簽の見本とみられる「謡本外題簽控」、観世大夫家の習事伝授目録を書写した「当流習目録弐巻」など二十八点の貴重な資料をご提供いただいた。また、古典芸能研究センターからは、「平松家旧蔵福王流番外謡曲八百十番本」（伊藤正義文庫）や「薗家系図」など、未公開の資料を含め二十三点の資料を展示した。

今回のように、他の研究機関から協力を得た展示は古典芸能研究センター初の試みであるが、日本伝統音楽研究センターの暖かいご支援のもと順調に展示準備を進めることができた。センターでは今後も他の研究機関と連携した企画展や共同研究など、活発な研究活動を広げていくことを予定している。最後に、本企画展にご理解・ご協力を賜った日本伝統音楽研究センターおよびプロジェクト研究会のメンバーに厚く御礼申し上げたい。

神戸女子大学古典芸能研究センター編

能面を科学する：世界の仮面と演劇

発行所：勉誠出版株式会社
体裁：A5 判上製・カバー装
頁数：329 頁
価格：本体 4,200 円＋税
刊行日：2016 年 3 月 25 日
ISBN:978-4-585-27027-0
C3074

概要：

平成 26 年 11 月に開催した国際研究集会「見つめる能面・能面を見つめる」（神戸女子大学古典芸能研究センター主催）を書籍化。これまではもっぱら美術的観点・芸能研究的観点から研究されてきた能面だが、「モノ」として科学的に分析をし、能面研究に新たな視点を持ち込もうという論集企画。さらに多角的視野から分析するため、ヨーロッパ、中国、韓国などの仮面についても取り上げ、日本の面と対比。山折哲雄氏寄稿、金剛永謹氏（金剛流宗家）インタビューも掲載。

目次：

まえがき（大谷節子）

第Ⅰ部　見つめる能面
　弘安元年銘翁面をめぐる考案―能面研究の射程―（大谷節子）
　能面のような人（山折哲雄）
　演者の視点から見る能面（金剛永謹）

第Ⅱ部　世界の仮面を見つめる
　ヨーロッパの仮面と仮面劇（ピーター・W・マルクス）（海老久人・訳）
　中国の仮面と仮面劇（廣田律子）
　韓国の仮面と仮面劇―その歴史的展開と諧謔性を中心に―（李応寿）

第Ⅲ部　能面を見つめる
　人類学の視点から見る仮面―仮面という装置が明かす人類の普遍性―（吉田憲司）
　仮面と化粧、博物館、そして誤解をめぐる考察（ジュリー・イエッツィー）（川森博司・訳）
　能面の古層―神楽面から見えること―（宮本圭造）
　猿楽面と神楽面（竹本幹夫）
　能面制作における模倣の概念について（根立研介）
　能面模写とその図像的特徴、および能面制作に関するさらなる考察（スティーヴェン・マーヴィン）（海老久人・訳）
　材料科学の視点から見る能・狂言面（高妻洋成）
　面の材質を科学する（杉山敦司）
　若い女面―その演出と美学の変遷―（モニカ・ベーテ）

あとがき（川森博司）

執筆者一覧

［付録］
能面・狂言面参考文献目録
英語要旨

神戸女子大学古典芸能研究センター紀要 10号

創刊10号記念

編：神戸女子大学古典芸能研究センター
頁数：198頁
発行日：2016年6月30日

目次：

「秀次本謡抄」の面影—養老寺蔵『養老之注』をめぐって—　天野文雄　p. 1
土佐少掾段物集と抜本—付タリ、『建武軍記』紹介—　阪口弘之　p. 20
役行者千年忌と元禄期の演劇—『丹州千年狐』とその関連作品をめぐって—　林久美子　p. 51
絵入狂言本『けいせい山椒大夫』の検討—嵐座・大和山座・都座—　川端咲子　p. 66
もう一つの大典能—大正大礼の京都における天覧能の頓挫—　中嶋謙昌　p. 81
神戸湊川能楽堂略史（二）—大正～昭和初期の神戸—　大山範子　p. 91

『都誓願寺如来之御本地』紹介と翻刻　井上勝志　p. 101
下田文庫所蔵『謡曲八百番目録　福王盛充奥書』の紹介　関屋俊彦　p. 118
江崎家旧蔵資料 横山杣人より江崎欽次朗直康あて書簡・葉書十二通（上）　長田あかね　p. 130
〈研究ノート〉能の教授における「自得空間」　藤田隆則　p. 138
〈書評〉橋本裕之著『儀礼と芸能の民俗誌』　川森博司　p. 145

〈特別寄稿〉スクナヒコを顕す神—案山子薬神考—　河田千代乃　p. 149
〈特別寄稿〉私と古典芸能研究センター15年　武藤美也子　p. 159

神戸女子大学古典芸能研究センター公開研究会「説経節—情念の語り物—」報告　井上　勝志　p. 163
特別講座報告「説教節—人は神仏に何を托そうとするのか—」　p. 166
企画展「ワキ方福王流の謡と歴史—江崎家旧蔵資料を中心に—」展示目録　p. 168
企画展「京の謡文化とその広がり—京観世岩井家を中心に—」報告　p. 189

古典芸能研究センター彙報（平成二十七年度）　p. 190

平　成　２８　年　度

神戸女子大学古典芸能研究センター開設15周年記念事業
『食満南北著「大阪藝談」』刊行記念講演会

日時：平成28年6月11日（土）13:00～16:00
場所：神戸女子大学教育センター5F 特別講義室
申込制・入場無料

神戸女子大学古典芸能研究センター開設十五周年記念事業の一環として、戦火をくぐり抜けて七十年ぶりに出現した食満南北の大阪の文化芸談『大阪藝談』を世に送り出すこととした。出版社は大阪の和泉書院。併せ、その刊行記念会を企画した。

登壇者は、先ず市川海老蔵の『壽三升景清』等で知られる新進脚本家の松岡亮氏。役者に囲まれての狂言作りの実際を講演いただく。続いて三林京子（桂すずめ）氏。「大阪芸能すずめ噺」と銘打って、文楽一家に育った女優・落語家として、上方芸能の諸ジャンルに亘る見聞経験談を披瀝いただく。更にお二人をもまじえ、古典から現代まで、演劇を幅広く取材してきた演劇評論家の立場から毎日新聞社の畑律江氏、食満南北ゆかりの食満厚造氏に加わっていただき、上方文化、上方芸能のこれまでとこれからを、芝居人南北の功績をも顕彰しながら、それぞれの切り口から縦横に語っていただく。トーク題を「大阪芸能よもやま談義」とした所以であるが、「大阪は人様が言うほど、文化や芸術に無関心でない」。食満南北の口癖であった。そんなあたりへ収斂出来ればと願う。聞き手阪口弘之。

プログラム：
講演
「歌舞伎の世界の裏と表」松岡亮（松竹株式会社 演劇製作部芸文室）
一人噺
「大阪芸能すずめ噺」三林京子（桂すずめ）（女優・落語家）
トークセッション
「大阪芸能よもやま談義」
登壇者
　松岡亮
　三林京子
　食満厚造（食満南北 縁者）
　畑律江（毎日新聞学芸部専門編集委員）
　　聞き手　阪口弘之（古典芸能研究センター特別客員研究員・神戸女子大学名誉教授）

成果公開：
『食満南北著『大阪藝談』』（神戸女子大学古典芸能研究センター叢書2）
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』11号 PP12-14
『神女広報－CROSSROADS－』Vol.23 2017冬
※http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/public_rel/crossroads/pdf/crossroads_vol23_02.pdf

『食満南北著『大阪藝談』』刊行記念講演会報告

井上勝志

神戸女子大学古典芸能研究センターが開設十五周年を迎え、その記念事業の一環として、古典芸能研究センター編『食満南北著『大阪藝談』』が二〇一六年六月に和泉書院から刊行された。これは、古典芸能研究センターを拠点とした科学研究費助成事業（代表者：阪口弘之、研究分担者：沙加戸弘・林久美子・井上勝志）の参考資料として購入された『大阪藝談』自筆原稿を活字化し、付録と索引などを付した一書である。この刊行に先立ち、新聞各紙でも本書が紹介され、著者である食満南北の幅広い交友関係にも注目が集まった。

その刊行を記念して、〈上方きっての劇通であり楽屋通であった食満南北〉にちなんで、現代の、歌舞伎をはじめとする諸芸能に関わる方々および南北と縁続きの方に御登壇いただいて成ったのが本講演会である（〈　〉内、講演会ちらしより引用。以下同じ）。同年六月十一日、午後一時から、神戸女子大学教育センター五階の特別講義室において、川森博司古典芸能研究センター長の挨拶で幕を開けた。百二十名の定員をはるかに超える申し込みがあったとのことであった。次第は次の通りである。

【講演】
歌舞伎の世界の裏と表　松岡亮氏（松竹株式会社演劇制作部芸文室）
【一人噺】
大阪芸能すずめ噺　三林京子（桂すずめ）氏（女優・落語家）
【トークセッション】
大阪芸能よもやま談義
松岡亮氏
三林京子（桂すずめ）氏
食満厚造氏（食満南北縁者）
畑律江氏（毎日新聞学芸部専門編集委員）
聞き手　阪口弘之（古典芸能研究センター特別客員研究員・神戸女子大学名誉教授）

〈市川海老蔵の『壽三升景清』等で知られる新進脚本家〉の松岡亮氏の講演は、自身が補綴された「時鳥花有里」も含まれる『義経千本桜』が上演されている、歌舞伎座での六月大歌舞伎などを例として、歌舞伎の舞台がどのように作られていくのか、役

者のみならず、道具方や衣装・床山等々、幕内のしきたりなどにも触れ乍ら、「歌舞伎の世界の裏と表」についてのお話であった。演劇制作部芸文室という舞台制作の現場に身を置かれる氏ならではのトピック満載の講演であり、会場の関心を引いていた。詳しくは、本誌所載の講演録に拠られたい。

続いて、文楽の人形遣いで、人間国宝であった二代目桐竹勘十郎師を父に、弟は三代目桐竹勘十郎師、という〈文楽一家に育った女優〉の三林京子氏には、幼少からの自身の芸能体験や、平成九年十一月、三代目桂米朝師に師事し、「桂すずめ」の名前を許された経緯などをお話しいただいた。また、大阪芸術大学短期大学部メディア・芸術学科専任教授としての経験もふまえて、現代およびこれからの芸能・演劇について、録音機器等を用いない「生」の重要性を説かれた。会場にお見えの、現役の文楽太夫さんにも話を振るなど、ユーモアを交えた親しみやすい「一人噺」であった。

ここで、休憩を挟んだが、この時間、会場近くのエレベーターホールでは、『食満南北著『大阪藝談』』の出版を引き受けていただいた和泉書院が出店されていた。同書をはじめ、関係書籍を実際に手にして、購入された方も少なからずいらっしゃったと仄聞する。

あらためて松岡氏、三林氏に御登壇いただき、食満南北の縁者である食満厚造氏と、〈古典から現代まで、演劇を幅広く取材してきた演劇評論家〉の畑律江氏の四名の方々にそれぞれの立場からお話しいただく「大阪芸能よもやま談義」と題したトークセッションが行われた。〈上方文化、上方芸能のこれまでとこれから

を、芝居人南北の功績をも顕彰しながら、それぞれの切り口から縦横に語っていただく〉という目論見通り、大阪芸苑の中心にいた食満南北の人となりや功績、当時の上方文化・芸能、そして、これからのありようなど、南北の縁者という立場、演劇制作の立場、演者の立場、舞台鑑賞の立場、それぞれに興味深い内容のお話を、阪口弘之特別客員研究員が聞き出され、会場一体となって聞き入っていた。あっという間に閉会時間である四時となってしまった。この上ない顔ぶれによる充実した「よもやま談義」であったゆえであるが、その様子は活字化され、本誌に掲載される。

なお、本講演会の開催に連動して、古典芸能研究センター展示室では、食満南北ゆかりの資料を展示した『食満南北著『大阪藝談』』刊行記念「食満南北」展が五月十日から六月十五日まで開催された。

「広い視野から古典芸能を考え、それを生活に活かしていくための材料を提供することを目ざして刊行する」と言う神戸女子大学古典芸能研究センター叢書の一書として『食満南北著『大阪藝談』』は刊行された。食満南北の筆が癖字難字ゆえ、その解読が困難であったため数度に亘る読み直しを迫られた結果ではあるが、折しも、中世芸能・近世芸能・民俗芸能を三つの研究の柱として、古典芸能の横断的・総合的研究拠点を目ざす古典芸能研究センターが、開港地神戸に開設されて十五年という節目の年に当たった。歌舞伎、落語、文楽、俄、色町等々の大阪芸能・文化の様々に通じた食満南北の未発表原稿を、古典芸能研究センターの編集で活字化して刊行し、加えて、それを記念して、多方面からの講師の御登壇を得て講演会を開催できたのは、まさに右記の本センター開設の趣旨に叶ったものであり、時と場を選んで成るべくして成ったことなのかもしれない。本講演会において、古典芸能といえども、机上の、あるいは、紙上の研究の対象としてだけ見るのではなく、現代に活きる芸能として参加者の方々と共有できたのではないかと思う。

〔附記〕『食満南北』展の図録は、別途、小冊子『食満南北著『大阪藝談』』刊行記念展示「食満南北」図録として七月に刊行予定です。

（古典芸能研究センター）

神戸女子大学古典芸能研究センター叢書2

『食満南北著『大阪藝談』』刊行

古典芸能研究センターでは、開設十五周年を記念して平成二十八年五月に和泉書院より、古典芸能研究センター編『食満南北著『大阪藝談』』（神戸女子大学古典芸能研究センター叢書2）を刊行しました。

（本体価格三二〇〇円）

【関連記事】

『毎日新聞』大阪版夕刊（平成28年5月12日）
夕刊ワイド「舞台　古典～現代」
畑　律江「歌舞伎脚本や評論　大大阪時代の才人、食満南北」

『日本経済新聞』大阪版夕刊（平成28年5月12日）

『読売新聞』大阪版夕刊（平成28年6月2日、9日）
再見なにわ文化48・49　肥田晧三

『大阪春秋』平成28年秋号

『出版ニュース』平成28年11月上旬号

【書評】

日置貴之氏『藝能史研究』216（平成29年1月）

西村　聡氏『金沢大学 国語国文』42（平成29年3月）

平成28年度仏教文学会６月例会
神戸女子大学古典芸能研究センター開設15周年記念事業

近世における縁起・僧伝の集成と展開

日時：平成28年6月18日（土）13:30～
場所：神戸女子大学教育センター5F 特別講義室
申込不要・入場無料

近世において、前代までに蓄積された寺社の縁起や高僧の伝記は、どのように集成され、あらたな展開を見せていくのか。また、同時代の情報はどのように汲み上げられているのか。『和州寺社記』（寛文年間成立）と『伽藍開基記』（元禄５年刊）という二書を中心に、その具体的様相を追う。

プログラム：
研究発表
「近世大和国地誌史における『和州寺社記』の位置」森田貴之（南山大学）
「『和州寺社記』の「名所」への意識 —一つ書き記事より—」柴田芳成（大阪大学）
「『伽藍開基記』の可能性 —懐玉道温の目指したもの—」山崎 淳（日本大学）
「刊本『伽藍開基記』巻第七と四国遍路—元禄二年の石手寺仁王像の修復記録を読み解く—」
原田寛子（神戸大学大学院博士課程修了）

（司会）内田澪子（お茶の水女子大学研究協力員）

成果公開：
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』11号 PP146

【特別企画報告】

神戸女子大学古典芸能研究センター開設15周年記念事業

平成二十八年度仏教文学会六月例会

「近世における縁起・僧伝の集成と展開」共催と

企画展「繋がる資料　―志水文庫蔵黄檗宗関連資料を中心に―」

六月十八日に、神戸女子大学教育センター五階の特別講義室で、仏教文学会六月例会が行われました。古典芸能研究センターは、仏教文学会からの申し出があり、開設15周年記念事業の一環として、この六月例会に共催という形で関わることになりました。また展示室では、仏教文学会例会で取り上げられた資料『和州寺社記』『伽藍開基記』に因んで、志水文庫の黄檗宗関連資料を中心にした展示を行いました。

当日の参加者には、これまでセンターを訪れたことがなかった人も多く、センターが所蔵する資料の多様性に関心が寄せられていました。今後もこうした外部との連携を進めていきたいと考えています。

平成二十八年度仏教文学会六月例会　プログラム

近世における縁起・僧伝の集成と展開

近世において、前代までに蓄積された寺社の縁起や高僧の伝記は、どのように集成され、あらたな展開を見せていくのか。また、同時代の情報はどのように汲み上げられているのか。『和州寺社記』（寛文年間成立）と『伽藍開基記』（元禄5年刊）という二書を中心に、その具体的様相を追う。

研究発表　（午後1時30分から）

近世大和国地誌史における『和州寺社記』の位置　　森田　貴之（南山大学）

『和州寺社記』の「名所」への意識　―一つ書き記事より―　　柴田　芳成（大阪大学）

『伽藍開基記』の可能性　―懐玉道温の目指したもの―　　山崎　淳（日本大学）

刊本『伽藍開基記』巻第七と四国遍路　―元禄二年の石手寺仁王像の修復記録を読み解く―　　原田　寛子（神戸大学大学院博士課程修了）

司会　内田　澪子（お茶の水女子大学研究協力員）

公開研究会
伝統と現代をつなぐもの―民俗芸能と古典芸能―

日時：平成 28 年 11 月 26 日（土）10:30～17:00
場所：神戸女子大学教育センター5F 特別講義室
申込不要・入場無料
主催：神戸女子大学古典芸能研究センター研究プロジェクト
「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」

現在、舞台の上で優雅に演じられる古典芸能の背景として、さまざまな歴史風土の中で地元の人々によって演じられてきた民俗芸能の存在が一般に想定される。しかし、両者は単に洗練と素朴の関係にあるのではなく、相互に共通する要素を持ち、互いに影響を与え合いながら、それぞれの場で発展を遂げてきたという見方も可能である。この研究会では、伝統と現代をつなぐ存在としての芸能の役割を、具体例に即しながら検討してみることにしたい。

プログラム：
趣旨説明
「伝統と現代をつなぐもの」川森博司（古典芸能研究センター長・神戸女子大学教授）
研究発表
①「沖縄における民俗芸能の位相―現代に生きる伝統―」
　遠藤美奈（沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員）
　※当初予定していた登壇者（久万田 晋（古典芸能研究センター客員研究員・沖縄県立芸術大学教授）より変更
②「民俗芸能における歌舞の儀礼性―古典芸能と民俗芸能をつなぐもの―」
　藤田隆則（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授）
③「兵庫県の祭りと芸能―伝統とその展開―」
　小栗栖健治（古典芸能研究センター客員研究員・元兵庫県立歴史博物館館長補佐）
④「播磨における王の舞の諸相」橋本裕之（追手門学院大学教授）
総合討論
コメンテーター
　宮本圭造（古典芸能研究センター客員研究員・法政大学能楽研究所教授）
　松尾恒一（国立歴史民俗博物館教授）
　（司会）川森博司

成果公開：
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』11 号 PP143-145
『神女広報－CROSSROADS－』Vol.24 2017 夏
※http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/public_rel/crossroads/pdf/crossroads_vol24_02.pdf

【特別企画報告】
公開研究会

「伝統と現代をつなぐもの
―民俗芸能と古典芸能―」

川森博司

二〇一四年度の「能面を科学する」、二〇一五年度の「説経節―情念の語り物―」に引き続き、二〇一六年度は民俗芸能に焦点を当てた公開研究会「伝統と現代をつなぐもの―民俗芸能と古典芸能―」を十一月二十六日に開催した。その内容は以下のとおりである。

【趣旨説明】
「伝統と現代をつなぐもの」
川森博司（古典芸能研究センター長・神戸女子大学教授）

【研究発表】
①「沖縄における民俗芸能の位相―現代に生きる伝統―」
遠藤美奈（沖縄芸術大学附属研究所共同研究員）
②「民俗芸能における歌舞の儀礼性
―古典芸能と民俗芸能をつなぐもの―」
藤田隆則（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授）
③「兵庫県の祭りと芸能―伝統とその展開―」
小栗栖健治（古典芸能研究センター客員研究員・元兵庫県立歴史博物館館長補佐）
④「播磨における王の舞の諸相」
橋本裕之（追手門学院大学教授）

【総合討論】
コメンテーター
宮本圭造（古典芸能研究センター客員研究員・法政大学能楽研究所教授）
松尾恒一（国立歴史民俗博物館教授）

今回の研究会では、民俗芸能の視点から古典芸能を含む芸能全般を横断的に考察するという構想を立てた。そして、民俗芸能の伝承の現場を体感的によく知っている人という視点から発表者の人選をおこなった。

題材としては、沖縄と兵庫県の芸能を取り上げ、間に民俗芸能と古典芸能をつなぐための理論的な考察をはさんだ。沖縄と兵庫に焦点を当てたのは、当センターが「沖縄祭祀資料データベース」と『兵庫県民俗芸能誌』の著者、喜多慶治氏の写真と調査ノートをまとめた「喜多文庫民俗芸能資料データベース」研究資料として公開しているからである。

まず、遠藤美奈氏による沖縄の民俗芸能の考察から研究会はスタートした。遠藤は竹富島の芸能における郷友会の役割、ハワイにおける沖縄移民による盆踊りの伝承などを取り上げ、これらの芸能が村社会の中で完結するものではなく、故郷から離れた人々を含めたダイナミックな伝承がおこなわれていることを示した。

次に、藤田隆則氏は、音曲における「なまり」という現象を取り上げ、芸の伝承において言葉の意味よりも形式性が優位になっていく現象が見られることを指摘した。いわば「コトバのウタ

化」という現象であり、これが崇高さという感銘を聞き手に与えるとともに、ときには形式性が過剰になることによって聞き手に退屈で苦痛な時間を与えることにもなるという理論的な枠組みを提示した。

続く小栗栖健治氏は、一ツ物や王の舞など都で人気を博していた祭礼芸能が、荘園との結びつきを背景に鎮守社の神事祭礼として播磨地域に取り入れられていったという枠組みを提示し、それが中世から近世へと時代が移り変わる中でどのように変化していったかを文献資料の根拠と照らし合わせながら明らかにして、兵庫県（特に播磨地域）の民俗芸能の位置づけを論じた。

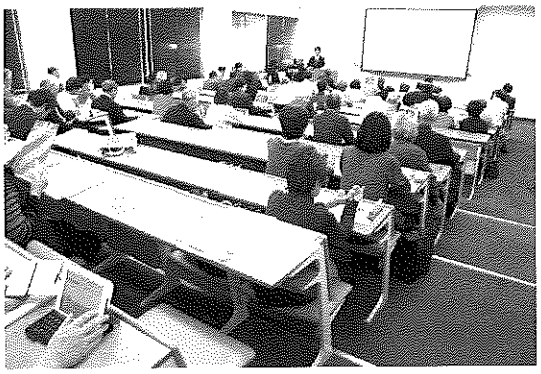
最後に橋本裕之氏は、播磨における王の舞の伝承の様相を、自身のフィールドワークにもとづいて具体的に紹介し、それらが中世前期にさかのぼる古い相貌を維持してきた一方、個々の祭礼において新しい相貌を派生させていったという両面性に注目し、民俗芸能が儀礼と芸能の中間に位置するユニークな身体技法であるという持論を展開させた。また、現在における伝承の試みとして「子ども教室」という場を取り上げて、民俗芸能研究が地域づくりや世代間交流という現在進行形の課題であることを示した。

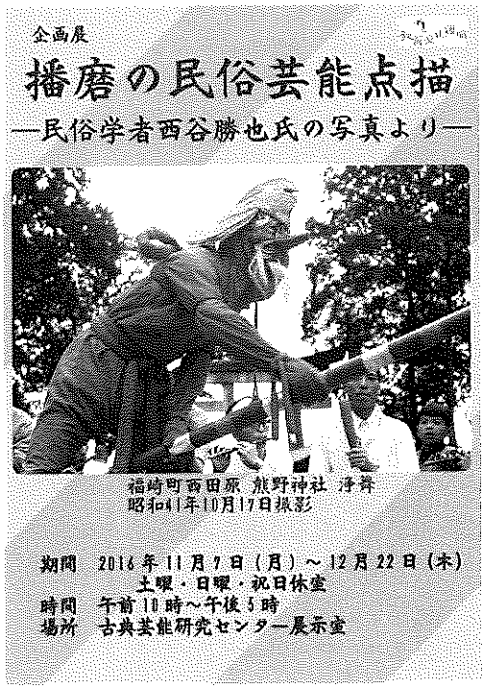
このように四者による研究発表が終わったのち、宮本圭造氏と松尾恒一氏によるコメントを皮切りに総合討論がおこなわれた。そこで話題になったのは、伝統的な芸能の形式を維持するための枠組みの強制的性格とその枠組みの中で自分たちの楽しみを作り出していこうとする人々の営みのあり方である。これは橋本氏が民俗芸能を「儀礼と芸能の中間に存在する可変的な領域」と位置づけたことに対応する。芸能史的な視点をとれば、能などの伝統的な古典芸能のくずれた形が地方で伝承されているという理解の枠組みがあり、それは一定の有効性をもつが、今回の研究会での議論から浮かび上がってきたのは、一口に「くずれ」といっても、それは伝承の現場でダイナミックに揺れ動きながら今日に至っているという側面である。ハワイにおける琉球盆踊りの定着の過程はその端的な事例である。

その「可変的な領域」の中で、能のように強い形式性の枠組みが付与される芸能と、規範性がそれほど強くなく、その場における即興的な演出が期待される芸能の間に、今日まで伝承されている諸地域のさまざまな芸能が位置づけられるという見取り図を描くことができる。その際に、沖縄の芸能の状況をひとつの参照軸とし、都の周辺の芸能のひとつの典型として兵庫県の芸能を位置づけて、そのバリエーションを考察していくことは、今後の展開の可能性を期待させるものである。沖縄の芸能を原初的なものとして単純に時間軸に位置づけるのではなく、同時代における「可変的な領域」のひとつのあり方として見ていけば、兵庫県の民俗芸能にも新たな光を当てることができる。そのような視野を提供するものとして民俗芸能の存在を浮き上がらせたことが、今回の研究会の成果であったといえる。

なお、公開研究会とタイアップした企画として、「播磨の民俗芸能点描―民俗学者西谷勝也氏の写真より―」と題する企画展を当センター展示室で開催した。一九〇六年（明治三九）生まれの

西谷勝也は宮本常一や赤松啓介と同世代の民俗学者である。昭和三〇年代から四〇年代にかけての兵庫県の祭事・芸能の貴重な記録写真が二〇一六年に当センターに寄託され、その中から公開研究会で言及される民俗芸能の写真を中心に展示をおこなった。公開研究会の発表内容を視覚的に補完するものであり、「伝統と現代をつなぐもの」としての写真の役割を改めて認識する機会になった。





神戸女子大学・神戸女子短期大学オープンカレッジ冬期講座

特別講座「あの世への想像力―日本人の死生観―」

期間：平成 28 年 2 月 7 日～3 月 14 日
　　毎週火曜・全６回（最終回は見学会）
時間：午後 2 時～3 時半

　かつての日本人は「あの世」への豊かな想像力を持ち、死者と共存しながら人生を意味づけてきました。この講座では、古典芸能、絵画資料、説話文学、民間信仰などを題材にしながら、その想像力の広がりに迫っていきたいと思います。

内容：
① 2 月 7 日
　近松世話浄瑠璃における「あの世」観
　　井上 勝志（古典芸能研究センター兼任研究員・神戸女子大学文学部教授）
② 2 月 14 日
　能が描く地獄の諸相
　　樹下 文隆（古典芸能研究センター兼任研究員・神戸女子大学文学部教授）
③ 2 月 21 日
　閻魔さまからの贈り物 ―有馬温泉の埋め経と縁起―
　　問屋 真一（古典芸能研究センター客員研究員）
④ 2 月 28 日
　地獄絵の世界
　　小栗栖 健治（古典芸能研究センター客員研究員）
⑤ 3 月 7 日
　人が死ぬ時 来迎の姿 ―志水文庫蔵「来迎図」さまざま 付り「涅槃図」解説―
　　川端 咲子（古典芸能研究センター非常勤研究員）
〈見学会〉3 月 14 日
　東福寺涅槃会（大涅槃図御開帳）
　　解説：川端咲子・川森博司

成果報告：
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』11 号 PP46-51

【特別講座要旨】

古典芸能研究センター特別講座

「あの世への想像力―日本人の死生観―」

日　時：二〇一七年二月七日～三月一四日（見学会含む）

場　所：神戸女子大学教育センター（三宮キャンパス）

〔各回の内容〕

二月七日　近松世話浄瑠璃における「あの世」観
井上　勝志（古典芸能研究センター兼任研究員・本学教授）

二月一四日　能が描く地獄の諸相
樹下　文隆（古典芸能研究センター兼任研究員・本学教授）

二月二一日　閻魔さまからの贈り物―有馬温泉の埋め経と縁起―
問屋　真一（古典芸能研究センター客員研究員）

二月二八日　地獄絵の世界
小栗栖　健治（古典芸能研究センター客員研究員）

三月七日　人が死ぬ時　来迎の姿
―志水文庫「来迎図」さまざま　付り「涅槃図」解説―
川端　咲子（古典芸能研究センター非常勤研究員）

三月一四日　見学会　東福寺涅槃会（大涅槃図御開帳）
解説　川森　博司・川端　咲子

講座の趣旨

かつての日本人は「あの世」への豊かな想像力を持ち、死者と共存しながら人生を意味づけてきました。この講座では、古典芸能、絵画資料、説話文学、民間信仰などを題材にしながら、その想像力の広がりに迫っていきたいと思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

近松世話浄瑠璃における「あの世」観

井上　勝志

一　人物の呼称

『堀川波鼓』中之巻の地の文において、小倉彦九郎の呼称が「主（あるじ）」「彦九郎」「夫」と使い分けられている。自ら手を掛けた妻・おたねの死骸に抱きつき号泣する幕切れでは、一家の「主」でもなく、武士としての「（小倉）彦九郎」でもなく、「十何年といふ年月を重ね、子まで養ひ置いたる仲」の「夫」として、その心情を吐露するのであった。

二　心中物の場合

掛詞や縁語などのレトリックとの関係や、「男」から「夫」へと呼称が変化した後、再び「男」という呼称が見られる例などもあるが、近松作心中物の場合、総じて死が意識された場面で「夫」という呼称が用いられる。

三　連れ立つ魂

『心中二枚絵草紙』の場合、「出でて返らぬ魂の、あこがれ添ふ」場面では、離れ離れのお島と市郎右衛門双方が「側に夫のある心」「夫はお島と連れ立ちて、歩む心」となるが、その「幻」が消えると、「男」と呼ばれる。再び「空蟬のもぬけの魂」が「互ひの形」となって現れた場面では、市郎右衛門は「夫」と呼ばれるが、死の直前、「両方の面影消えてなかりけり」となり、「男は女の姿を尋ね、女は市様〳〵」と、苦しみのうちに息絶える。

別々の場所で死なねばならなかった二人に必ずやあったにちがいない「同じ枕に死にたいなあ」「その二階顔を並べて死にたいなあ」という思いを近松は掬いあげ、「この世」からなる「あの世」とでも言うべき「幻」の「夫」を出現させて見せたのである。そして、観客もまた、この設定をせめてもの「恋路の、回向」としたのであろう。

四　訪れる幻、揃わぬ二人

『あとをひ心中卯月の潤色』では、与兵衛（助給）は妻・お亀と心中を図ったが、一人生き残り、お亀の菩提を弔っている。そんな与兵衛が「魂魄に気を奪はれたる夢心地」となっていると、お亀が現れ、口説・悋気をするが、その姿は消え失せてしまう。ようよう正気づいた与兵衛は、お亀の魂魄がまだとどまって、言葉を交わしたのかと思い至る。そこで、「お亀なければ甲斐もなし」お亀がいない「この世」に意味はない、「恋しき人は先にあり」お亀のいる「あの世」でいっしょになろう、と自害する。「あの世」を設定し、そこへの通路を想定して、行き来を可能にしたことで、逆に、よりいっそうの喪失感や断絶感が感じられたのであろう。

****

能が描く地獄の諸相

樹下　文隆

恵心僧都（源信、九四二～一〇一七）は、念仏の正しい在り方を示す『往生要集』を著し、欲に満ちた現世の人々が赴く地獄の凄絶な様相を記し（厭離穢土）、清浄心の者のみが住む浄土に生まれるよう願う（「欣求浄土」）ことの大切さを説いた。以来、法要の場などでは『往生要集』の示す地獄が語られ、描かれ、演じられてきた。結果、人々の興味関心に答えて地獄や鬼の芸能が生まれた。

能の母体である大和猿楽は、鎌倉時代から南都興福寺に奉仕して地獄や鬼の芸能に馴染み、自ら演じてもいたらしい。世阿弥は応永七年（一四〇〇）、鬼の物まねを「ことさら大和の物」（『花伝』）と記した。しかし、幽玄な歌舞能を目指した世阿弥は、応永二十八年には、心も形も鬼（地獄の鬼）の能を一度限りの芸と戒め（『二曲三体人形図』）、最晩年の永享七年（一四三五）には、鬼の能は「こなたの流には知らぬこと」（金春大夫宛書状）と全否定した。地獄や地獄の獄卒である鬼が描かれる能を取り上げて依拠資料を指摘しつつ、世阿弥作品での鬼や

地獄の扱われ方を考えた。

世阿弥以前に成立した謡物「地獄の曲舞」は、当初世阿弥によって《百万》（古作《嵯峨物狂》の改作）に取り込まれたが、後に別の曲舞に差し替えられ、世阿弥の子、元雅作《歌占》に取り込まれた。また、世阿弥は地獄の鬼が登場した古作《塩竈》を改作して、鬼を排除した《融》を作った。地獄の鬼が登場する世阿弥関与の能では、殺生の罪を描いた《鵜飼》、邪淫の罪を描いた《求塚》《船橋》《恋重荷》《砧》など、すべて結末に亡者の成仏や守護神化が示されるのに対し、世阿弥の手を経ていないと思われる《阿漕》《善知鳥》、元雅作《綾鼓》は亡者が地獄から逃れることのない結末が描かれる。また、世阿弥作《野守》は、山伏の願いにより地獄の鬼が真実を写す浄玻璃の鏡を見せるために現れる。鬼の演技を忌避した世阿弥は、恐ろしいだけの鬼を作品の眼目に置かないように努力したのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

閻魔さまからの贈り物　―有馬温泉の埋め経と縁起―

問屋　真一

温泉は冥土との境界にあり、地獄と極楽が共存する蘇生の場と信じられてきた。鎌倉時代の是害坊縁起絵巻には有馬の出湯について「地獄ノ東門ヲ此地ニ示シテ…」とある。有馬の縁起の一つ、尊恵の蘇生譚・後日譚（「冥途蘇生記」）にも同様な考えが顕著に見られる。同縁起は鎌倉時代前期の成立だが、尊恵が閻魔王から自筆法華経を贈られた部分、四度目の折に閻魔王宮の東門にあたる温泉山に如法堂を造立して五重箱で納経するよう勧められた部分は後補との説もある。しかし文永八年（一二七一）銘の経箱に「依閻魔法皇勧進奉納温山如法経」の銘文があること、また享禄元年（一五二八）の火災で発見された二重経箱が鎌倉時代後期のものであることから、鎌倉時代後期、当該部分は既に流布していたと考えられる。また温泉寺律院では縁起絵により尊恵譚などを絵解きしていた。冥土とつながる霊地とされた有馬では十三世紀以降、如法法華経を如法堂に納める埋納経によって閻魔王との結縁が図られていたのである。

この結縁を勧進したのは叡尊、忍性に代表される西大寺系律宗である。同派は積極的に民衆への布教や社会事業を担っていたが、叡尊は弘安四年（一二八一）三月、温泉寺で堂供養、二二一人に菩薩戒を授けた。当時の温泉寺は律院であり、また前述の二重経箱の意匠について西大寺系律宗の金工品との近似性が指摘されている。なお文永八年銘経箱の奉納者は叡尊の結縁者の一人と同じ名前である。一方、瑞渓周鳳『温泉行記』では如法堂の北にある光明蔵に触れている。その付近は足利義教追善石塔・木製卒塔婆・三重塔婆が並ぶところであり、光明蔵とは西大寺奥の院骨堂と同様な納骨堂であったと思われる。有馬の西大寺系律宗は納経と納骨信仰を基軸に活動していたと考えられる。

しかし享禄元年の回禄以降、西大寺系律宗の活躍は見られなくなり、信仰のあり方も変化する。納経と納骨による閻魔王との結縁から、閻魔王から授かった法華経や衆生済度の偈頌札との結縁にかわるとともに、他の地域の寺院にも拡がり、有馬という場に限定されない信仰に変容したといえる。

地獄絵の世界 ―熊野観心十界曼荼羅を中心に―

小栗栖　健治

仏教が百済から伝えられたのは、六世紀中期のこととされる。仏教とともにもたらされた六道思想は、日本人固有の死後世界と結びつき、そのあり方を変容させていった。

我が国では、地獄道を描いた絵画だけでなく、六道を描いた絵画をも含めて地獄絵と総称している。九世紀前期に成立した『日本霊異記』に収められた説話には、地獄に対する怖れが感じられない。地獄における熾烈な責め苦が鮮明に描き出されるのは、十世紀に源信が撰述した『往生要集』である。その後、中国からもたらされた『十王経』が人気を博し、これを日本的に翻案した『地蔵十王経』は日本人の死後世界を定型化へと向かわせた。『地蔵十王経』を踏まえた十三仏信仰の誕生は、現代社会に受け継がれている先祖供養の規範を形成したのである。

『往生要集』の内容を絵画した著名な作例として、聖衆来迎寺本六道絵（鎌倉時代）をあげることができる。その後、十王信仰の影響を受けて六道絵と十王図は習合し、六道十王図と称すべき図像が登場した。

室町時代後半における社会構造の変化は、不産女地獄や両婦地獄、賽の河原など仏教に説かれていない地獄を誕生させる。家名・家業・家産を継承する母体となる家意識の成立が、新たな地獄を創造したのである。

日本の地獄絵の中で模写本が多く制作された事例、また、同じ図像を量産した事例として、聖衆来迎寺本六道絵と熊野観心十界曼荼羅（別頁掲載）がある。前者は中世・近世を通じて多くの模写本が製作され、これら模写本は往生要集絵と総称されている。一方、後者は女性宗教者熊野比丘尼が携行し、勧進活動に用いた。人生、女性と子どもの地獄、追善供養などを描き、何でもありのように思える熊野観心十界曼荼羅の多様性は、家意識の高まりの中で新しく登場してきた来世の世界観を積極的に取り入れたものだった。

近世初頭から江戸時代末期まで製作された熊野観心十界曼荼羅は、日本の社会において広く受け入れられた地獄絵である。そこに描かれている死生観は、現代社会を生きる私たちにも強く影響を与えているのである。

人が死ぬ時 来迎の姿 ―志水文庫蔵「来迎図」さまざま 付リ「涅槃図」解説―

川端　咲子

地獄によった話が続く講座の最終回は、極楽へ往生する話という事で、人々がどのように極楽や極楽への往生ということをイメージしてきたのかを、『栄花物語』、『法然上人行状絵伝』、志水文庫蔵の仏教版画の来迎図、各地の来迎会（練供養）の写真などを使って概観した。

『栄花物語』では、藤原道長の最期の様を「御目には弥陀如来

の相好を見奉らせ給、御耳にはかう尊き念仏をきこしめし、御心には極楽をおぼしめしやりて、御手には弥陀如来の御手の糸をひかへさせ給て、北枕に西向に臥させ給へり。」と記す。道長が望んだ極楽とはどのような場所であったのか。人々は何をもって「極楽浄土」をイメージしたのか。浄土の姿は、当然ながら経典に記されている。その経典に書かれた浄土の様を視覚化・絵画化したのが、「浄土曼陀羅」や「兜率天曼陀羅」などで、中でも有名なのが、「浄土変相図」俗に言う「当麻曼荼羅」である。

死後に仏の浄土へ行く事を望んだ人々が切望したのは、阿弥陀仏が諸菩薩を連れて迎えに来る「来迎」であった。『法然上人行状絵』では、最期を迎える法然のもとに、紫雲がたなびき、阿弥陀・観音・勢至が法然を迎えにやって来る。これが、理想的な死ぬ時のあり方であった。そして、その理想的な死ぬ時の様子を絵に描いたのが「来迎図」である。「阿弥陀聖衆来迎図」「阿弥陀三尊来迎図」「山越阿弥陀」と「来迎図」には様々な種類があり、絵画・版画の形で流布し、人々に「死ぬ時」の姿をイメージさせた。また、平面的に「来迎」描いた「来迎図」に対し、立体的に「来迎」の姿を視覚化したのが、当麻寺ほかで現在も行われている練供養であった。

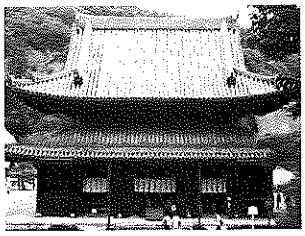
近世になって、古浄瑠璃には、来迎の様子を大がかりなカラクリを利用して観客に見せた作品がいくつもある。いずれも、来迎図や来迎会で作り上げられた「来迎」のイメージが舞台上で展開したものと思われる。しかし、こうした浄瑠璃は、時代から下ると次第に姿を消していく。

見学会報告　東福寺涅槃会（大涅槃図御開帳）

川端　咲子

講座の最終回は、涅槃会の期間、特別に開帳されている東福寺の涅槃図の見学会を行った。受講生の半数以上が参加した当日は、東福寺駅に集合したあと、薄曇りの天気の中、川森センター長による解説などを聞きながら、ゆっくりと徒歩で東福寺本堂へ向かった。京都三大涅槃図の一つである東福寺の涅槃図は、釈迦の涅槃に集まった動物たちの中に、猫が描かれているので有名である。前回の講座の最後に、涅槃図の多様性についてと東福寺の涅槃図を見る際のポイントを解説していたので、皆それを思い出しながら、正面から沙羅双樹の様子を確認したり、脇から描かれているはずの猫を確認したり、じっくりと涅槃図を拝観した。その後、時間のある人は近くの泉涌寺へ移動して、こちらの涅槃図も拝観した。これも京都三大涅槃図の一つである。また泉涌寺の心照殿展示室には、小ぶりの涅槃図が展示されており、三つの全く趣の異なる涅槃図を一度に見ることで、その多様性を実感する事ができたのではないか。

東福寺北門でセンター長から解説を聞く


東福寺本堂

〔図版〕熊野観心十界曼荼羅（個人蔵）　（＊49ページ参照）

『食満南北著『大阪藝談』』刊行記念展示
食満南北

平成 28 年 5 月 10 日～6 月 15 日

図録・目録公開：
『食満南北著『大阪藝談』』刊行記念展示「食満南北」図録』
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2016/2016bmokuroku.pdf

企画展
繋がる資料―志水文庫蔵黄檗宗関連資料を中心に―

平成 28 年 6 月 18 日～7 月 29 日

目録公開：
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2016/2016cmokuroku.pdf

幕末・近代の狂言の絵師たち

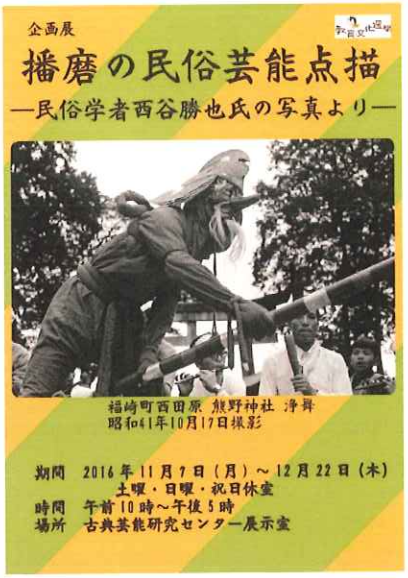
平成 28 年 9 月 13 日～10 月 21 日

目録公開：
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2016/2016emokuroku.pdf

企画展
播磨の民俗芸能点描
―民俗学者西谷勝也氏の写真より―

平成 28 年 11 月 7 日～平成 29 年 1 月 20 日

目録公開：
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2016/2016f-mokuroku.pdf



企画展
此岸から彼岸へ―志水文庫蔵仏教版画展―

平成 29 年 2 月 6 日～3 月 31 日

目録公開：
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2017/2017amokuroku.pdf

神戸女子大学古典芸能研究センター編
神戸女子大学古典芸能研究センター叢書２
食満南北著『大阪藝談』

発行所：和泉書院
体裁：四六上製
頁数：口絵カラー4 頁・402 頁
価格：本体 3,200 円＋税
刊行日：2016 年 5 月 31 日
ISBN:978-4-7576-0794-1
C1374

概要：
古典芸能研究センター開設 15 周年を記念して、明治から昭和にかけて活躍した狂言作者であり評論家でもある食満南北の、脱稿後 70 年間行方不明となっていた自筆原稿『大阪藝談』を紹介。ほかに『若殿の悪戯』『劇壇三十五年』（複製）も収録。大阪芸苑の中心にいた南北ならではの名優・人の逸話録であり交遊録。

目次：
口絵（書画　食満南北）
例言　iii

食満南北著『大阪藝談』
　序
　目次
　その一　歌舞伎篇
　その二　上方落語篇
　その三　文楽篇
　その四　大阪俄篇
　その五　春の踊篇
　その六　南北篇

『若殿の悪戯』
『劇壇三十五年』（複製）

食満南北の思い出（食満厚造）
『大阪藝談』解説（阪口弘之）
『大阪藝談』索引（芸名・作品名・登場人物名・人名・事項）　（左開）
『大阪藝談』図版一覧

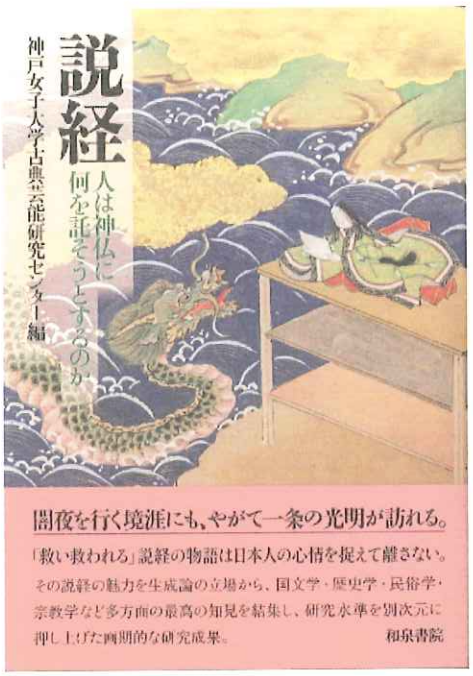
企画展「ワキ方福王流の謡と歴史―江崎家旧蔵資料を中心に―」
展示目録（増補版）

編集・発行：神戸女子大学古典芸能研究センター
体裁：A4 版
頁数：29 頁
価格：非売品
刊行日：2016 年 9 月 24 日

概要：
平成 27 度開催の企画展「ワキ方福王流の謡と歴史―江崎家旧蔵資料を中心に―」展示目録の増補版。『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』10 号に掲載した内容に、江崎家所蔵の軸６点の写真と翻字や系図などの参考資料を追加。巻末にはイラストレーターkyoran（きょうらん）氏の展示見学レポートも掲載。

神戸女子大学古典芸能研究センター編
神戸女子大学古典芸能研究センター叢書３

説経：人は神仏に何を託そうとするのか



発行所：和泉書院
体裁：A5 判上製・カバー装
頁数：口絵 2 頁・384 頁
価格：本体 4,500 円＋税
刊行日：2017 年 3 月 25 日
ISBN:978-4-7576-0831-3
C1395

概要：
平成 27 年度に開催した公開研究会「説経節—情念の語り物—」および特別講座「説経節—人は神仏に何を託そうとするのか—」の成果を書籍化。説経の魅力を、生成論の立場から、国文学・歴史学・民俗学・宗教学など多方面から考察し、研究水準を別次元に押し上げることを目指した論集企画。付録にドイツ・フランクフルト市立工芸美術館蔵フォーレッチ本「さよひめ」などを翻刻紹介。

目次：
口絵『せつきやうおくり』/『さんせう太夫物語』

序論　語り物としての説経—栄華循環の神仏利生譚—（阪口弘之）

第 1 章　説経の成立
1 節　説教から説経へ—西大寺流律僧の説話世界を軸に—（小林直樹）
2 節　『直談因縁集』所収説話と説経（小林健二）
3 節　慶長六年の「操説経興行」と慶長期の遺跡出土かしらをめぐって（加納克己）
4 節　絵画化された説経—絵巻・奈良絵本のさまざま—（川崎剛志）

第 2 章　説経作品の諸相—道を行く物語
1 節　「かるかや」の物語—「高野巻」と四国の弘法大師伝承との関係—（武田和昭）
2 節　「さんせう太夫」の物語—膚の守の地蔵菩薩と系図の巻物—（井上勝志）
3 節　「をぐり」の物語—十王由来譚—（川端咲子）
4 節　説経正本「松浦長者」の成立（阪口弘之）

第 3 章　説経の周縁
1 節　説教者と身分的周縁（塚田 孝）
2 節　『信太妻』という語り物—狐と文殊が託したもの—（林久美子）
3 節　越前大野城下の座頭と瞽女（マーレン・A・エーラス）
4 節　真宗寺院における教化の諸相—「絵解」の成立—（沙加戸 弘）

付録（翻刻紹介）
ドイツ・フランクフルト市立工芸美術館蔵フォーレッチ・コレションの奈良絵本群について
（ベルント・イォハン・イェッセ）
1　フォーレッチ本「さよひめ」（カティア・トリプレット）
2　『しゆつせ物語』解題・翻刻（桑 汐里）

結語（川森博司）

神戸女子大学古典芸能研究センター紀要 11号

【特集】古典芸能研究センター開設15周年記念

編：神戸女子大学古典芸能研究センター
頁数：156頁
発行日：2017年6月30日

目次：

古典芸能研究センター開設15周年記念特集号に寄せて　　川森博司　p.1
古典芸能研究センター　平成二十二年度～平成二十八年度のあゆみ　　山崎敦子　p.2

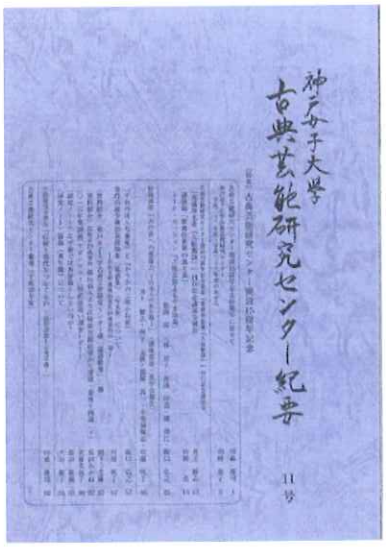
古典芸能研究センター開設15周年記念事業『食満南北著『大阪藝談』』刊行記念講演会
　『食満南北著『大阪藝談』』刊行記念講演会報告　　井上勝志　p.12
　講演録「歌舞伎の世界の裏と表」　　松岡亮　p.15
　トークセッション「大阪芸能よもやま談義」
　　松岡 亮・三林京子・食満厚造・畑律江・阪口弘之　p.25

特別講座「あの世への想像力—日本人の死生観—」〈講演要旨・見学会報告〉
　　井上勝志・樹下文隆・問屋真一・小栗栖健治・川端咲子　p.46

『すわのほんぢ兼家』と『かうかの三郎かね家』　　阪口弘之　p.52
豊竹山城少掾旧蔵段物集〔乱曲集〕(写真版)について
　　—志水文庫蔵横山重氏旧蔵資料の一環—　　川端 咲子　p.67
〈資料紹介〉神戸女子大学古典芸能研究センター蔵「謡道歌巻」二種　　樹下文隆　p.83
〈資料紹介〉江崎家旧蔵資料 横山杣人より江崎欽次朗直康あて書簡・葉書十四通（下）
　　長田あかね　p.92
二〇一六年粟国島「ヤガンウユミ」祭祀後追い調査レポート　　武藤美也子　p.104
〈研究ノート〉能ではなぜお辞儀をしないのか？　　藤田隆則　p.111
〈研究ノート〉謡曲《書写鏡》について　　大山範子　p.131

公開研究会報告「伝統と現代をつなぐもの —民俗芸能と古典芸能—」　　川森博司　p.143

古典芸能研究センター彙報（平成二十八年度）



平　成　２９　年　度

志水文庫公開ワークショップ

期間：平成 29 年 7 月～平成 30 年 3 月
場所：古典芸能研究センター

志水文庫所収の資料について各分野の専門家による閲覧・調査を実施し、古典芸能研究センター所員が公開のための教授・助言を受ける

内容：
① 7 月 27 日（木）、8 月 3 日（木）
　初期狂歌資料
　　大谷 俊太（京都女子大学文学部 教授）
② 8 月 4 日（金）
　芝居小屋図面
　　来海 素存（本学家政学部 准教授）
③ 8 月 10 日（木）
　文庫全体（訪書）
　　飯倉 洋一（大阪大学大学院文学研究科 教授）及びゼミ生
④ 8 月 30 日（水）
　歌舞伎資料
　　廣瀬 千紗子（同志社女子大学表象文化学部 特別任用教授）
　　倉橋 正恵（立命館大学衣笠総合研究機構 客員研究員）
⑤ 9 月 1 日（金）、平成 30 年 2 月 28 日（水）～3 月 1 日（木）
　浄瑠璃関係資料
　　田草川 みずき（千葉大学高等教育研究機構 准教授）
⑥ 11 月 1 日（水）、平成 30 年 3 月 15 日（木）～3 月 16 日（金）
　狂歌関係資料
　　小林 ふみ子（法政大学文学部 教授）

成果公開：
「電子版 和書目録」への反映
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』12 号（平成 30 年 6 月 30 日刊行予定）など

2017 年度公開研究会
古典芸能研究の横断と総合

日時：平成 29 年 11 月 25 日（土）11:00～17:00
場所：神戸女子大学教育センター（三宮）
申込不要・入場無料
主催：神戸女子大学古典芸能研究センター研究プロジェクト
「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」

神戸女子大学古典芸能研究センターは、研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」において、古典芸能・民俗芸能およびその周縁に関わる所蔵資料を縦横無尽に活用することで、分野・時代・地域を越えた考察を行い、古典芸能の始原と変遷について解明する研究の拠点作りを目指してきた。国際研究集会「見つめる能面・能面を見つめる」（平成 26 年度）、公開研究会「説経節—情念の語り物—」（平成 27 年度）、同「伝統と現代をつなぐもの—民俗芸能と古典芸能」（平成 28 年度）を経て、プロジェクト最終年となる本年度は、そのまとめとして、時代やジャンルの枠を越えた古典芸能研究への展望を総合的に検討する。グローバルな視点から日本の古典芸能の位置づけを考えるとともに、所蔵資料をもとにした芸能の展開の考察に、民俗学的研究の視点を加えて、横断的研究の可能性を模索する。

プログラム:
講演
「世界の中の日本芸能」
時田アリソン（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所長）
シンポジウム
テーマ「古典芸能研究の横断と総合」
「中世芸能の宗教的背景—伊藤正義文庫と中世宗教テクストの世界から見えるもの—」
阿部泰郎（古典芸能研究センター客員研究員・名古屋大学大学院文学研究科教授）
「能楽研究の現況と課題—『風姿花伝』奥義の「奥義」の意味とそれをめぐる問題をめぐって—」
天野文雄（古典芸能研究センター客員研究員・京都造形芸術大学舞台芸術研究センター所長）
「民俗芸能へのまなざし／民俗芸能からのまなざし」
川森博司（古典芸能研究センター長・神戸女子大学文学部教授）
討論
時田アリソン・阿部泰郎・天野文雄・川森博司・フロア
（司会）藤田隆則（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授）

成果公開：
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』12 号（平成 30 年 6 月 30 日刊行予定）
『神女広報－CROSSROADS－』Vol.26 2018 夏（平成 30 年 7 月刊行予定）

神戸女子大学古典芸能研究センター研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」
公開研究会「古典芸能研究の横断と総合」

公開研究会「古典芸能研究の横断と総合」　趣旨・報告

川森　博司

二〇一三年度より五か年計画で始まったプロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的拠点の形成」が最終年度を迎えた。その締めくくりの研究会として、文字どおり古典芸能研究の「横断」と「総合」をテーマにした研究会を開催することとした。横断という側面に関しては、当センターが中世芸能、近世芸能、民俗芸能の三つの柱を立てて研究を進めていることから、この三つの分野を横断して考える視野を提供することが必要とされる。また、総合という側面については、この三つの分野を結びつける視点が必要とされる。

この研究会では、まず「語り物」という視点が横断と総合のために有効であると考え、日本の語り物の研究をグローバルな視点から長年進めてきた時田アリソン氏に研究会の口火を切る講演をお願いした。ここで示された世界の語り物の広がりの中に日本の語り物を位置づける視座は、日本の古典芸能の特質を考えていくうえでの土台を提供してくれるものであった。

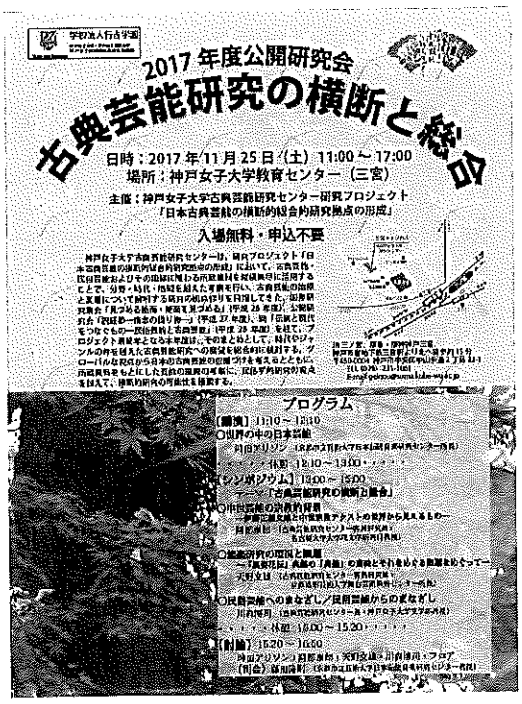
午後のシンポジウムでは、古典芸能研究の横断と総合のために、ある意味で特権的な視座を提供してくれる当センター所蔵の伊藤正義文庫の意義を語ってもらおうと、まず阿部泰郎氏に「中世芸能の背景―伊藤正義文庫から見えるもの―」というテーマで発議をお願いした。そこでは、芸能を根源からとらえようとする視点の意義とそこからの豊饒な展開の可能性が示された。

次に、能楽におけるテクスト研究の最前線がどのあたりにあるかを天野文雄氏に語ってもらおうとした。天野氏は『風姿花伝』の読み解きを具体例として、横断ののちに時代背景の縦軸をどのように立てて古典芸能研究を総合していくかについて見解を述べられた。阿部・天野の両氏の発表は直接的には中世芸能を題材にするものではあるが、そこを視座として、古典芸能の諸ジャンルの間に新たな相互連関を見出していこうとする試みであったと考えている。

三番目には、川森が民俗芸能を視点として、古典芸能の諸ジャンルをどのように横断し、そこにどのようなつながりを見出していけるかという視点から議論をつないだ。民俗学者の折口信夫や宮田登の見解を導きとしながら、必ずしも歴史的に古いものではなくても、現場で演じられるそのつどの芸能のありようから、それぞれの古典芸能の発生の様相について感覚的な考

察の基盤を得ることができるのではないか、という提言をおこなった。

この四者の発表を「横断と総合」という観点から改めて交通整理し、討論の枠組みを作る役割を藤田隆則氏にお願いした。その的確な整理を出発点として、歴史のうねりの中にさまざまな芸能を位置づけていく視点と、表現の問題として共通のありようを見ていこうとする視点の間で、ダイナミックな議論が展開され、日本の古典芸能の研究を風通しのよい場所に置く展望が得られたのではないかと考えている。



公開研究会「古典芸能研究の横断と総合」
日時：二〇一七年一一月二五日（土）
場所：神戸女子大学教育センター　5階特別講義室
主催：神戸女子大学古典芸能研究センター研究プロジェクト
「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」

【講演】
○世界の中の日本芸能
　時田アリソン（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所長）

【シンポジウム】
テーマ「古典芸能研究の横断と総合」
○中世芸能の宗教的背景
　―伊藤正義文庫と中世宗教テクストの世界から見えるもの―
　阿部泰郎（古典芸能研究センター客員研究員・名古屋大学大学院文学研究科教授）
○能楽研究の現況と課題
　―『風姿花伝』奥義の「奥義」の意味とそれをめぐる問題をめぐって―
　天野文雄（古典芸能研究センター客員研究員・京都造形芸術大学舞台芸術研究センター所長）
○民俗芸能へのまなざし／民俗芸能からのまなざし
　川森博司（古典芸能研究センター長・神戸女子大学文学部教授）

【討論
　時田・阿部・天野・川森
（司会）藤田隆則（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授）

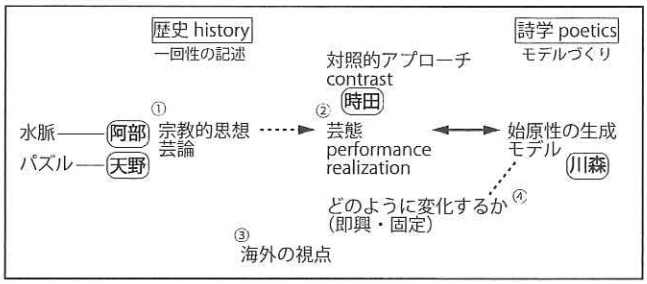
初校

シンポジウム「古典芸能研究の横断と総合」　総合討論

時田アリソン　阿部泰郎
天野文雄　川森博司
藤田隆則（司会）

藤田：討論部の司会をさせていただきます、藤田と申します。素晴らしい四本の発表を聞かせていただきまして、とても面白かったです。それぞれに素晴らしい語り口があるのだなと思って感心しました。多分、皆さんも同じお気持ちだと思います。今から、何とかしてこれを「横断」させて「総合」させ、この出会いがあったことによって、さらに何かいいことが起こるという方向を目指したいと思います。

今日のお話ですけれども、私なりに頭を整理するために話を聞きながら、図を書いてみました（上図）。最初の時田さんのお話は、語り物を中心に、それがどのような即興性を持っているのか、今現在の伝えられているものの姿がどういうふうに即興性を失っていったかという、比較的近い時代で描くことのできる変化を扱っておられて、しかもそれが他の国との比較、「比較」という言葉よりも、「対照」という言葉を使った方が学問的にはいいと思いますので、「対照」にしますが、それぞれの地域を対照させながら、似ていることが起きている、そして相互に参照できるということを指摘されたと思います。



私は図の上の方に「詩学と歴史」と書きました。これはアリストテレスが書いているアプローチの二つで、「歴史」のほうは、過去の1回に起こったことを研究する方向性、「詩学」はこれから起こり得る、つまりモデルのようなものをつくる方向を向いているということです。そうなりますと、時田さんの話は、さまざまな芸能を対照させながら、こういうふうな変化が起こり得るという予測を可能にするような、

藤田隆則

初校 古典芸能研究センターからのお知らせ

公開研究会「古典芸能研究の横断と総合」

神戸女子大学古典芸能研究センターは、平成29年11月25日（土）に公開研究会「古典芸能研究の横断と総合」を開催し、約60名の参加者を迎える盛況となりました。

午前は、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所長 時田アリソン氏の講演「世界の中の日本芸能」でした。平家物語、浄瑠璃といった語り物に焦点をあて、日本以外のイタリア、韓国、中国など世界各国にも語りの伝統が存在することを紹介した上で、日本の語り物の特徴についての興味深い指摘がなされました。

午後のシンポジウムは、公開研究会のテーマである「古典芸能研究の横断と総合」について、各分野の研究者を交えて発表と討論を行いました。

名古屋大学大学院文学研究科教授 阿部 泰郎氏は、本学の故 伊藤 正義名誉教授の研究業績に言及しつつ、特に金春 禅竹の言説を取り上げて、中世芸能の宗教的背景についての見解を発表をしました。

京都造形芸術大学舞台芸術研究センター所長 天野 文雄氏は、能楽研究の現況についての解説の後、『風姿花伝』第五奥義を取り上げ、「奥義」が持つ意味を指摘、そこから見える『風姿花伝』の構造や成立事情、世阿弥にとっての「秘伝」意識について発表をしました。

神戸女子大学古典芸能研究センター長 川森 博司教授は、東北地方のなまはげや沖縄のミルク神などの来訪神に関わる儀礼を紹介し、折口信夫や岡本太郎の言説を引用しつつ、民俗芸能の視点から古典芸能のあり方を探ることが可能ではないかという提言をしました。

討論は、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授 藤田 隆則氏の司会により、発表者三人に時田氏も加わって行われました。藤田氏の巧みな主導のもと、それぞれの立場から古典芸能研究に関する様々な視点について活発な意見が交わされました。

京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター
所長 時田アリソン氏

京都造形芸術大学
舞台芸術研究センター所長・
古典芸能研究センター客員研究員
天野文雄氏

名古屋大学大学院
文学研究科教授・
古典芸能研究センター
客員研究員 阿部泰郎氏

京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター
教授 藤田隆則氏

この公開研究会は、平成25年度文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択された古典芸能研究センターの研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」の一環として開催しました。

神戸女子大学・神戸女子短期大学オープンカレッジ秋期講座

特別講座「源氏物語と芸能」

期間：平成 29 年 9 月 25 日～10 月 30 日
　　毎週月曜・全５回と 10 月 28 日（土）能楽鑑賞会
時間　午後 1 時半～3 時

平安時代に生まれた『源氏物語』は、成立時から現代まで、日本の文学・芸術・芸能に様々なかたちで影響を与えてきました。この講座では、最初に、文学作品としての『源氏物語』の魅力やその成立背景について学びます。そこから、中世・近世の古典芸能が『源氏物語』をいかに受け止め変容させたかについて、それぞれの専門の立場からアプローチしていきます。第 4 回と第 5 回の間には、『源氏物語』を題材にした能〈野宮〉を、能楽堂で鑑賞します（自由参加・入場料自己負担）。なお、鑑賞に先立ち、観世流シテ方の能楽師 上田拓司氏を迎えて、〈野宮〉をはじめとした『源氏物語』関係の能について、演じ手の視点からどのように捉えているのかなどをお聞きします。『源氏物語』の深い味わい、『源氏物語』を題材とした古典芸能の豊かな内容を伝える講座です。

内容：

① 9 月 25 日
　源氏物語と平安文化
　　北山 円正（古典芸能研究センター兼任研究員・神戸女子大学文学部教授）

② 10 月 2 日
　源氏物語と能
　　大山 範子（古典芸能研究センター非常勤研究員）

③ 10 月 16 日
　能〈野宮〉の構想
　　樹下 文隆（古典芸能研究センター兼任研究員・神戸女子大学文学部教授）

④ 10 月 23 日
　演者に聴く―観世流シテ方上田拓司氏を迎えて―
　　上田 拓司 氏（観世流シテ方）
　　聞き手　長田あかね（古典芸能研究センター非常勤研究員）

⑤ 10 月 30 日
　源氏物語と近世の浄瑠璃
　　川端 咲子（古典芸能研究センター非常勤研究員）

〈能楽鑑賞会〉10 月 28 日（土）
「〈野宮〉の舞台を観る」（観正会定式能観能）
　上田観正会能楽堂（長田区大塚町）※入場料自己負担
　解説・案内：長田あかね

成果報告：
『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』12 号（平成 30 年 6 月 30 日刊行予定）

二校

【特別講座要旨】

「源氏物語と芸能」

日　時：二〇一七年九月二五日～一〇月三〇日
場　所：神戸女子大学三宮キャンパス

〔各回の内容〕

九月二五日
源氏物語と平安文化
北山　円正（古典芸能研究センター兼任研究員・本学教授）

一〇月二日
源氏物語と能
大山　範子（古典芸能研究センター非常勤研究員）

一〇月一六日
能〈野宮〉の構想
樹下　文隆（古典芸能研究センター兼任研究員・本学教授）

一〇月二三日
演者に聴く―観世流シテ方上田拓司氏を迎えて―
上田　拓司氏（観世流シテ方）
（聞き手）長田あかね（古典芸能研究センター非常勤研究員）

一〇月三〇日
源氏物語と近世の浄瑠璃
川端　咲子（古典芸能研究センター非常勤研究員）

一〇月二八日
能楽鑑賞会「〈野宮〉の舞台を観る」於上田観正会能楽堂
解説・案内　長田　あかね

講座の趣旨

平安時代に生まれた『源氏物語』は、成立時から現代まで、日本の文学・芸術・芸能に様々なかたちで影響を与えてきました。この講座では、最初に、文学作品としての『源氏物語』の魅力やその成立背景について学びます。そこから、中世・近世の古典芸能が『源氏物語』をいかに受け止め変容させたかについて、それぞれの専門の立場からアプローチしていきます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

源氏物語と平安文化

北山　円正

十一世紀の初め頃に紫式部が書いた源氏物語は、当時の文化を結集して生まれたと考えてよい。漢詩文・和歌・仏教・芸能・美術等々、当時のさまざまな文化を巧みに取り込みながら、物語を作り出している。

その中の漢詩文との関わりについて触れておきたい。須磨に退居した光源氏が、八月十五夜に月を眺めながら、都の人々に思いをはせる場面がある。このあたりの表現は、中国の詩人白居易の有名な「三五夜中新月色、二千里外故人心」を踏まえており、その悲歎や孤独を巧みに描き出している。紫式部は詩人かつ歌人である藤原為時の娘であり、幼い頃から漢詩文に親しんでいた。その教養を物語創作に活かしたのである。

音楽について取り上げておく。紅葉賀巻における桐壺院の行幸の際に、光源氏が「青海波」という雅楽を舞い唄う。まず試楽（予行）がある。その舞は「世に見えぬさまなり」、声は「仏の御迦陵頻伽の声ならむ」と評せられ、観衆は魅了されて涙を流したとある。行幸の本番においても、「青海波の輝き出でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ」「入り綾のほど、そぞろ寒く、この世のこととともおぼえず」と、尋常ではない素晴らしさであると讃えている。ここでは光源氏の美しさを、ことばを尽くして表現しているのだが、この曲の内容を十分踏まえた上で描いており、紫式部の造詣がうかがえる。

光源氏が「青海波」を舞う場面は、後に安元二（一一七六）年に催された、後白河法皇の五十歳をことほぐ賀宴を記録する安元御賀記において、平維盛が「青海波」を舞う表現に用いられる。そして、平家物語の同じ場面にも引き継がれ、維盛の舞の見事さを讃えた。光源氏の「青海波」は、王朝美の代表として、人々の心に深く刻まれたのである。

源氏物語は、古典文学の中でことのほか有名であり、これまで多くの人々に読み継がれている。この作品が、豊かな平安朝の文化を背景にして成り立っていることを知れば、ますますその味わいは深まることであろう。

****

源氏物語と能

大山　範子

『源氏物語』が後代の文学・文化に及ぼした影響の大きさは言うまでもないが、中世の主たる芸能である能も、またその例にもれない。第二講では、まず物語の概要と『源氏物語』を典拠とする能（源氏物語もの）の紹介をした。そして、中世に『源氏物語』がどのように享受されてきたかをさまざまな方面から見ながら、能が典拠とした世界が、それらと共通していること―いわば時代性―を確認した。

能の「源氏物語もの」は、物語に登場する女性達を主人公とした夢幻能が大半を占める。それ以外に、物語とは直接係わらない作品（例えば〈忠度〉〈頼政〉などの修羅能）でも、須磨や宇治といった『源氏物語』ゆかりの土地が舞台となる場合には、詞章にその影響が見いだせる。

中世の『源氏物語』享受については、具体的には、作り物語を書いた紫式部が地獄に堕ちたとされる伝説に基づく〈源氏供養〉のほか、文学面では登場人物や作品に対する批評、注釈書や梗概書（ダイジェスト版）に見られる当時の読まれ方、連歌の寄合詞などを示した。また、能に先行する謡い物である「宴曲（早歌）」の詞章にも触れた。このような「中世源氏物語」とも呼ばれる世界は、物語本文には描かれていないことがらをも含んでおり、能の創作背景ともなったのである。

さらに作者について。能の作品は、当然のことながら時代性の

みならず作者による個性も見られるが、この点についてはごく簡単に解説をした。世阿弥が本格的な「源氏物語もの」を作らなかった一方で、禅竹は物語本文に拠りつつ複数の作品を作っている。また、素人作者が多いことも特徴的である。

****

能〈野宮〉の構想

樹下　文隆

能〈野宮〉は、『源氏物語』賢木巻に基づき、能〈井筒〉を手本として「高貴の女性の激しい愛憎の果ての憂愁寂寥の世界」（新潮日本古典集成『謡曲集　下』解題）を主題とし、能〈葵上〉が示す嫉妬と恥辱で復讐の鬼と化す六条御息所像に対し、光源氏への愛情を残しつつも、往事を静かに回想して静寂の境地に至った御息所像を提示する。ここには、義満以後の時代における美意識の変化を読み取ることができる。

『伊勢物語』で「井筒の女」「人待つ女」と呼ばれた紀有常の娘が、業平の形見の装束を着して業平との純愛を回想する〈井筒〉は、王朝美の世界を中世に再構築させた世阿弥の傑作である。有常の娘は、愛人が他の女のもとに出向いても嫉妬せず、強い愛の情念を昂ぶらせていく「待ち続ける女」の具現化と言えようか。

『源氏物語』葵巻で、光源氏の正妻、葵上の一行の車争いにより恥辱を受けた六条御息所の生霊が葵上をとり殺す場面を、憎悪の余り悪鬼となった生霊が行者に調伏される形で劇化した〈葵上〉は、近江猿楽の犬王が演じ、世阿弥も手を加えた可能性がある、嫉妬や憎しみが高貴な女性をも鬼に変えうる恐ろしさを舞台上で見せることに成功した作品である。

この二作品は、平安朝の物語に登場する女性をシテとし、高貴な女性のひたむきな純愛と激しい嫉妬の憎悪を対照的に描く。『源氏物語』に精通していたと思われる〈野宮〉の作者は、賢木巻における光源氏と六条御息所の最後の逢瀬を取り上げ、寂寥の中に光源氏への想いを灯し続ける御息所の姿を描いた。ひたすら堪えて待つ女も嫉妬に怒り狂う女も、最後には男への愛情を残しながら、憂愁静寂の境地にたどり着くのだと解釈することができる。王朝人の素直な喜怒哀楽の表現から生まれる華やかさや派手さが幽玄美と意識されたであろう北山文化に対し、ほとぼしる情念の赴くままの行為の記憶が余韻として残るだけの侘び寂びの境地を幽玄美と感じる、後の東山文化へとつながる新風潮「冷えに冷えた」（『申楽談儀』）美を、〈野宮〉にも見ることができる。

****

演者に聴く　―観世流シテ方上田拓司氏を迎えて―

※後掲

****

源氏物語と近世の浄瑠璃

川端　咲子

一、近世における『源氏物語』受容の様相

近世になると、古典文学は版本（印刷された本）の形で広く普及していく。『源氏物語』もまた、写本で伝わっていた時代と比べて、遥かに多くの人が読むことが出来る状態になる。

版本の『源氏物語』は、本文のみのものから始まり、挿絵入りや頭注付き（首書）のものなど、より読みやすい本が読者に提供される。また近世には、『源氏物語』を典拠（下敷き）にした柳亭種彦作『偐紫田舎源氏』のような文学作品が多数作られる。

二、『源氏物語』と近世演劇

近世の古典芸能、つまり人形浄瑠璃や歌舞伎と『源氏物語』の関係は、中世の能ほどには深くない。浄瑠璃や歌舞伎には、『源氏物語』をそのまま題材にした演目はほとんどない。生涯に百以上の浄瑠璃を書いた近松門左衛門にも、『源氏物語』をそのまま題材にした浄瑠璃はない。これは、同じ王朝物語でありながら、『伊勢物語』が度々浄瑠璃化・歌舞伎化され、業平の恋・惟高惟仁位争い・伴氏の謀反といった諸要素を巻き込みながら一つの世界を形成していったのとは、ずいぶんと異なった動きである。

ただし近松門左衛門が『源氏物語』に無関心であったわけではない。近松の作品には、『源氏物語』の文章が何カ所も使われており、『源氏物語』の様々な設定が趣向として取り入れられている。

三、『源氏物語』と古浄瑠璃

古浄瑠璃の時代、京都の宇治加賀掾や江戸の土佐少掾といった太夫たちは、『源氏物語』を題材にした浄瑠璃を少なからず上演している。古典文学や能を浄瑠璃に取り入れたことでよく知られる宇治加賀掾は、『源氏物語』の「石山寺起筆伝説」を元にして、能の「源氏供養」を取り込んだ浄瑠璃『江州石山寺源氏供養』を度々上演している。そこには、紫式部と藤原信高の恋や、大がかりなからくりなど、観客を楽しませる趣向が様々に凝らされている。この作品に限らず、『源氏物語』を題材にした古浄瑠璃は、原典である『源氏物語』からは大きく飛躍した世界を展開しているのが特徴であるが、それは近世における『源氏物語』受容のあり方の一端を示しているといえる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

能楽鑑賞会報告

大山　範子

四回目の講義後の一〇月二十八日（土）、上田同門会主催の観会定式能で「野宮」の上演が予定されていたので、希望者を募り長田神社近くの上田観正会能楽堂へ赴いた。

開演前十一時四十分からは、演者による解説「能への誘い」（今回は上田顕崇氏）に加え、特別に長田あかね氏（センター非常勤研究員）による曲目解説も行われた。その後、能「野宮　合

謡のたのしみ―謡う・聴く・読む―

平成 29 年 4 月 25 日～6 月 30 日

目録公開：
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2017/2017bmokuroku.pdf

企画展
源氏物語の広がり～古典芸能の世界へ～

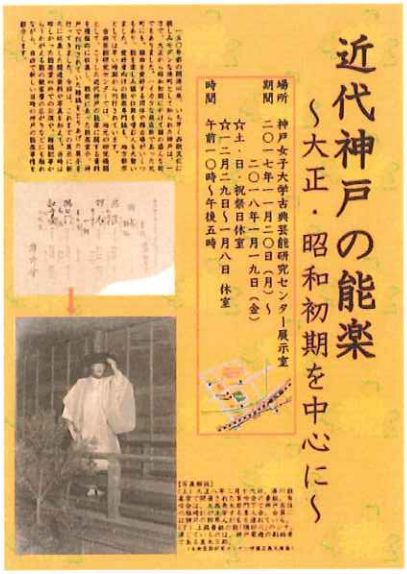
平成 29 年 9 月 25 日～11 月 2 日

目録公開：
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2017/2017dmokuroku.pdf

近代神戸の能楽～大正・昭和初期を中心に～

平成 29 年 11 月 20 日～平成 30 年 1 月 19 日

目録公開：
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2017/2017emokuroku.pdf



志水文庫の大津絵と大原神社の絵馬「踊り子図」

平成 30 年 2 月 5 日～3 月 30 日

図録公開：
http://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/07-exhibition1/img2018/2018a.pdf

神戸女子大学古典芸能研究センター編
神戸女子大学古典芸能研究センター研究資料集１
説経稀本集

編集担当　井上勝志
発行所：和泉書院
体裁：A5 並製横本
頁数：154 頁
価格：本体 3,800 円＋税
刊行日：2018 年 3 月 30 日
ISBN:978-4-7576-0873-3
C3395

概要：
平成 28 年度刊行『説経：人は神仏に何を託そうとするのか』（神戸女子大学古典芸能研究センター叢書 3）を補完する資料集。「神戸女子大学古典芸能研究センター研究資料集」の第一冊目。ドイツ・フランクフルト市立工芸美術館蔵フォーレッチ・コレクションと個人蔵の稀本を図版（カラー）と翻刻で紹介。

目次：
ドイツ・フランクフルト市立工芸美術館蔵　フォーレッチ・コレクションの奈良絵本群について
（ベルント・ヨハン・イェッセ）
『〔くまのゝ本地〕』（ベルント・ヨハン・イェッセ）
　翻刻・解題・図版
『ほうめうとうし』（ジョン・シュミットヴァイガント）
　翻刻・解題・図版
『あいご物語』（阪口弘之）
　翻刻・解題・図版
『つほさかのさうし』（阪口弘之）
　翻刻・解題・図版

食満南北著『大阪藝談』』刊行記念展示
「食満南北」図録

編集・発行：神戸女子大学古典芸能研究センター
体裁：A4 版
頁数：16 頁
価格：非売品
刊行日：2017 年 7 月 31 日

概要：
平成 28 年度に『食満南北著『大阪藝談』』の刊行を記念して開催した展示「食満南北」展の展示図録。『大阪藝談』の原稿をはじめ、センター所蔵の南北関係資料や、他大学・個人所蔵の南北の書画を掲載。

神戸女子大学古典芸能研究センター紀要 12 号

編：神戸女子大学古典芸能研究センター
頁数：150 頁（予定）
発行日：2018 年 6 月 30 日（予定）

内容（予定）：

公開研究会「古典芸能研究の横断と総合」
　シンポジウム「古典芸能研究の横断と総合」　要旨・総合討論・報告など

志水文庫ワークショップ　概要・資料紹介など

特別講座「源氏物語と芸能」　要旨・見学会報告

師伝書研究会　翻刻・報告など

牛若丸と田楽法師　　橋本裕之

近世の人身御供伝説―「法妙童子」と「佐世姫」―　　カティア・トリプレット

新刊案内『説経稀本集』刊行

古典芸能研究センター彙報（平成二十九年度）

データベース

喜多文庫民俗芸能資料データベース

http://www.suma.kobe-wu.ac.jp/kita/

（１）活動経過

平成 25 年度

・補完作業として現在の民俗芸能調査

播磨国総社三ッ山大祭（4 月）

板橋の田遊（平成 26 年 2 月）

平成 26 年度

・補完作業として現在の民俗芸能調査

日吉大社山王祭（4 月）

誕生寺練供養（4 月）

平成 27 年度

・補完作業として現在の民俗芸能調査

日吉大社山王祭（4 月）

平成 28 年度

・西谷勝也氏民俗調査資料の寄託を受ける

・企画展「播磨の民俗芸能点描―民俗学者西谷勝也氏の写真より―」開催

西谷勝也氏寄託資料と喜多文庫資料をあわせて展示

平成 29 年度

・補完作業として現在の民俗芸能調査

太山寺練供養・得生寺練供養（5 月）

雲ヶ畑松上げ（8 月）

大津祭（10 月）

（２）成果

補完作業として行った現在の民俗芸能調査の成果および、西谷勝也氏による兵庫を主体とした昭和 10 年代から 40 年代の民俗調査資料の寄託により、データベースの充実化を目指すことが可能となった。

（３）課題

・補完作業として行った調査で収集した資料のデータ整理とデータベースへの追加

・西谷勝也氏民俗調査資料の整理とデータベースへの追加

・喜多慶治氏・西谷勝也氏についての調査（聞書等）

沖縄祭祀資料データベース

http://www.suma.kobe-wu.ac.jp/ryukyu/

（１）活動経過

平成 25 年度～29 年度

・伊是名島「シヌグ」「ウンジャミ」ページ作成（祭祀日程表・写真データの作成）

・コンテンツ（音源・動画）追加

　公開済みデータの修正と更新

　アナログ音源・動画のデジタル化および整理・加工と公開

・英語ページ作成

　英訳

　データ作成と公開

・後追い調査

　伊是名島（平成 25 年 9 月）
　石垣島・西表島（平成 26 年 9 月）
　粟国島（平成 28 年 7 月）
　渡名喜島（平成 29 年 5 月）

・トップページ（概要・凡例）改訂準備

・検索システム改良準備

（２）成果

・伊是名島「シヌグ」「ウンジャミ」ページ公開準備

・音源、参考動画コンテンツ追加

・英語ページ公開（平成 28 年 8 月、久高島「イザイホー」・石垣島祖内「節祭」）

・後追い調査に基づく更新

　※調査報告

　　武藤美也子「石垣島・西表島祖納後追い調査報告」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』9号）
　　武藤美也子「二〇一六年粟国島「ヤガンウユミ」祭祀後追い調査レポート」（『(同上)』11号）

・展示　写真展「沖縄の祭祀 1978-2013」開催

（３）課題

・伊是名島「シヌグ」「ウンジャミ」公開

・コンテンツ（音源・動画）追加・更新

・トップページ改訂

・検索システム改良

・英語ページに関する検討（コンテンツ追加への具体的段取り、検索システムの改良・整備など）

・用語表記（日本語版・英語版）についての基準作成

檜書店旧蔵版木データベース

http://hangi.yg.kobe-wu.ac.jp/

（１）活動経過

平成 25 年度～29 年度

・公開済みデータの修正と更新
・文字が彫られていない部分の画像公開（覚書や作業メモなどの書付あり）
・版木の全体像をカラー撮影（既存は文字部分のみのモノクロ撮影）
・「全体像」画像追加（＊既存は「文字正像」「文字鏡像」のみ）

（２）成果

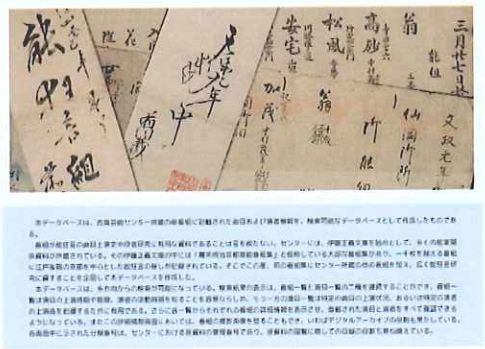
・データ更新
・文字が彫られていない部分の画像公開
・版木の全体像画像の公開

（３）課題

・板木１枚毎の情報（寸法（厚さ）・重量、はしばみの状況）データを追加
・版木とその版木で摺られた板本とのリンク（「参考」欄に画像を掲載）
・「電子版和書目録」およびデジタルアーカイブとの横断検索検討
・檜書店刊行謡本出版史の作成と本コレクションの位置付け（明治・大正期の謡本出版状況を見直す資料として）

古典芸能研究センター蔵能番組データベース

http://noh-bangumi.yg.kobe-wu.ac.jp/



（１）活動経過

平成 25 年度～29 年度

・伊藤正義文庫蔵能番組の書誌調査および写真撮影

・基本情報（上演年月日・上演場所・上演形態の種別・上演曲など）と詳細情報（出演者・小書〔特殊演出〕・その他）データ入力

・画像データ作成（撮影写真の画像処理）

・文字と画像データ公開

（２）成果

・伊藤正義文庫蔵約 1430 点公開

これにより、江戸から明治に及ぶ京都を中心とした能・狂言の演能状況を、曲目・出演者等の検索機能を通して網羅的に把握することが可能となった。また、能番組の画像は、デジタルアーカイブの役割も果たしている。

（３）課題

・伊藤正義文庫蔵全点公開に向けた継続作業

・センター所蔵能番組（伊藤正義文庫以外）の網羅的公開に向けた作業

電子版和書目録・デジタルアーカイブ

http://wasyo.yg.kobe-wu.ac.jp/

（１）活動経過

平成 25 年度
・書誌データ入力

平成 26 年度
・網羅的撮影開始
・書誌データ入力（継続）
・画像データ作成（撮影写真の画像処理）開始
・伊藤正義文庫能楽関連資料公開
・「電子版和書目録」公開（平成 26 年 10 月 23 日）

平成 27 年度
・撮影（継続）
・書誌データ入力および画像データ作成（継続）
・伊藤正義文庫能楽関連以外資料公開
・センター所蔵和書（志水文庫以外）公開

平成 28 年度
・撮影（継続）
・書誌データ入力および画像データ作成（継続）
・データ訂正開始
・センター所蔵和書（新規購入・寄贈資料）公開
・電子版和書目録に付随するデジタルアーカイブの構築開始

平成 29 年度
・撮影（継続）
・書誌データ入力および画像データ作成（継続）
・データ訂正（継続）
・志水文庫書誌データ公開準備完了
・センター所蔵和書（新規購入・寄贈資料）公開
・デジタルアーカイブ画像公開（一部）
・電子版和書目録システムの一部改訂
・電子版和書目録に付随するデジタルアーカイブ機能追加（画像を PDF 化して印刷）

（２）成果
・「電子版和書目録」公開
　※「古典芸能研究センター蔵書検索について」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』9号 pp153）
・センター所蔵和書（志水文庫以外全て）公開
・デジタルアーカイブ画像公開（一部）

（３）課題
・志水文庫公開
・全所蔵資料の撮影と画像データ作成
・デジタルアーカイブの更新と充実
・横断検索の構築